

[032]報告

郭, 俊海
九州大学留学生センター : 教授

大神, 智春
九州大学留学生センター : 教授

脇坂, 真彩子
九州大学留学生センター : 准教授

楠木, 理香
九州大学留学生センター : 准教授

他

<https://doi.org/10.15017/7172566>

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 32, pp.45-151, 2024-03. International Student Center,
Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



部門・コースの活動報告2024

九州大学留学生センター

(報 告)

基幹教育の日本語	郭 俊海・大神智春・脇坂真彩子・楠木理香	45
日本語研修コース	大 神 智 春	53
Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語	脇坂真彩子・楠木理香	61
2023年度 伊都キャンパス・病院（馬出）キャンパス日本語補講コース	柴 田 あづさ	75
筑紫・大橋地区日本語コース ― 2023年度 ―	小 山 悟	83
日本語・日本文化研修コースの報告（第23期生）	郭 俊 海	87
農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 ― 2023年度の実施状況 ―	柴 田 あづさ	93
2022年度 “AsTW2023” 実施報告	生 田 博 子	97
Kyushu University Japan In Today's World (JTW) A Brief Review of the 29 th Class (Oct. 2022—Jul. 2023)	Masa Higo, Ryoichi Imai and Chisato Nonaka	101
2022年度九州大学留学生センター留学生指導部門報告 （カウンセリング関係）	黄 正国・肥後裕輝	109
令和5年度スーパーグローバル大学創成支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」	生 田 博 子	115
九州大学農学部の国際プログラムにおける優秀な人材の確保に向けた取り組み	房 賢貞・中村真子	121
ヘブライ大学とのオンライン COIL プログラム実施報告	木 下 博 子	127
College of Asia Pacific in Guam 2023 実施報告書	木 下 博 子	131
九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞（伊藤早苗賞） 留学生センター専任教員の受賞歴の報告	肥後裕輝・野中ちさと・脇坂真彩子・木下博子	137
Kyushu University New International Student Orientation A Report of Fall 2023 Orientation	Masa Higo and Zhengguo Huang	143
2023年度九州大学留学生センター FD 会	黄 正国・楠木理香	149

基幹教育の日本語

Report on the Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese

郭 俊 海*

大 神 智 春*

脇 坂 真彩子**

楠 木 理 香**

1. はじめに

基幹教育では、「学び方、考え方を学ぶ」姿勢の涵養こそが学問追求の基本であるという観点に立ち、自ら問いを立て主体的な学びのできるアクティブ・ラーナーを育成することを目標として掲げている。基幹教育院のマネジメントのもと、全学出動態勢で教育が行われている。学部留学生が対象の「日本語」は、基幹教育院教員を班長とする日本語班において、留学生センターの日本語教育部門の教員と連携して、授業運営を行っている。

基幹教育の「日本語」は言語文化科目・言語文化基礎科目に分類されている。平成31年4月から、基幹教育の日本語は留学生センターの日本語コース（JACs: Japanese Academic Courses）と一本化され、言語文化基礎科目・日本語（Fundamental Subjects for Language and Culture/Japanese）として開講されている。

2. 令和5年度の実施概要

2. 1. 開講科目及び履修方法

「日本語」のカリキュラムは、四技能（聞く・話す・読む・書く）を段階的にバランスよく伸ばし、大学の学士課程で学術活動を行えるレベルの日本語の運用能力を身につけられるように編成されている。1年生においては、様々な話題を取り上げ、文法や語彙の学習、読解や作文練習、口頭発表やディスカッション等を行う。2年生以上においては、より抽象度の高い専門的なテーマを取り上げ、読解やディスカッション、アカデミック・ライティングの実践等を通して、より高度な日本語運用能力を

*九州大学留学生センター教授

**九州大学留学生センター准教授

身につけることを目指す。

4月入学の全学部1年生は「基幹教育科目（日本語Ⅰ～Ⅳ）」、2年生以上は「基幹教育科目（日本語Ⅴ～Ⅶ）」を履修することとなっている。「日本語」を細分類すると表1のようになる。

共創学部10月入学生は、総合日本語（Japanese Integrated）、漢字（Japanese Kanji）、会話（Japanese Speaking）、作文（Japanese Writing）の4コースから必要単位数分の授業を選択し履修することになっている（表2）。

基幹教育科目の日本語を履修するには、通常の履修登録に加えて、授業開始前にならず専用のシステムへの受講登録が必要であり、春学期と秋学期の開始前に、基幹教育教務係を通じて学生へ周知している。

令和5年度は、留学生の学期前の入国が可能となったため、学期開始時から全クラスを対面で実施した。ただし、緊急時にオンライン授業への切り替えがスムーズに行えるように、春学期（Q1）は、4月中に1回と必要に応じてさらにもう1回オンライン授業を取り入れることとし、夏学期（Q2）・秋学期（Q3）・冬学期（Q4）は、緊急時にオンライン授業の対応に不安があるクラスのみ、オンライン授業を1～2回取り入れることとした。

表1 学部正規留学生対象日本語科目一覧及び開講学期¹

科目名	単位数	開講学期					
		1年前期		1年後期		2年前期	
		春	夏	秋	冬	春	夏
日本語Ⅰ（J1-6A）	1	○					
日本語Ⅱ（J1-6B）	1		○				
日本語Ⅲ（J1-7A）	1			○			
日本語Ⅳ（J1-7B）	1				○		
日本語Ⅴ（J1-8A）	1					○	
日本語Ⅵ（J1-8B）	1						○
日本語Ⅶ（JW-8A）	1					○	

表2 共創学部10月入学生対象日本語科目一覧及び開講学期²

コース レベル		I		K		S		W	
		Japanese Integrated （総合コース） 各1単位		Japanese Kanji （漢字コース） 各1単位		Japanese Speaking （会話コース） 各1単位		Japanese Writing （作文コース） 各1単位	
		春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期	春・秋 学期	夏・冬 学期
1	Japanese 1 / 入門	JI-1A	JI-1B	JK-1+2A	JK-1+2B	-	-	-	-
2	Japanese 2 / 初級1	JI-2A	JI-2B			JS-2A	JS-2B	-	-
3	Japanese 3 / 初級2	JI-3A	JI-3B	JK-3A	JK-3B	JS-3A	JS-3B	-	-
4	Japanese 4 / 中級入門	JI-4A	JI-4B	JK-4A	JK-4B	JS-4A	JS-4B	-	-

1-2『2023年度入学者用 基幹教育 履修要項』（112～113）頁より抜粋（・一部改編）

5	Japanese 5 / 中級 1	JI-5A	JI-5B	JK-5A	JK-5B	JS-5A	JS-5B	JW-5A	JW-5B
6	Japanese 6 / 中級 2	JI-6A	JI-6B	JK-6A	JK-6B	JS-6A	JS-6B	JW-6A	JW-6B
7	Japanese 7 / 上級入門	JI-7A	JI-7B	JK-7A	JK-7B	JS-7A	JS-7B	JW-7A	JW-7B
8	Japanese 8 / 上級	JI-8A	JI-8B	JK-8A	JK-8B	JS-8A	JS-8B	JW-8A	JW-8B

2. 2. 単位履修のオリエンテーション

毎年4月の一週目に、新入学部留学生（共創学部生も含む）を対象に、基幹教育の言語文化基礎科目・日本語科目の履修方法、科目登録及び日本事情に関するオリエンテーションを実施している。また、秋学期開始前には、共創学部10月入学生及び工学部・農学部学士課程国際コース（International Undergraduate Programs in English（以下 IUPE））の学生を対象にオリエンテーションを実施している。

令和5年度4月はセンター2号館で対面式のオリエンテーションを実施した。また、オリエンテーション後も、問い合わせがあった学生に対して、適宜履修に関する指導や対応を行った。共創学部10月入学生とIUPE生に対しても、対面でオリエンテーションを実施した。また、受講登録終了後に未登録者や登録失敗者に対して、所属学部の教務係経由で受講登録の指導を行った。

2. 3. 単位の取り方

基幹教育科目では、第1・第2外国語の選択は平成25年以前と大きく異なり、大半の学部では「日本語」は基本的に第2外国語（文科系5単位、理科系4単位）に変わった。なお、学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数は以下のようにになっている（表4・5）。

【共創学部以外の外国人留学生対象】

日本語を第1・第2外国語に選択した場合は、所属学部・学科の卒業単位数を満たすように、原則として次のよう履修させることにしている（表4）。

表3 日本語の履修³

科目名	単位	開講学期	修得上限単位	再履修の仕方
日本語Ⅰ（J1-6A）	1	1年春	1	日本語Ⅰを再履修すること
日本語Ⅱ（J1-6B）	1	1年夏	1	日本語Ⅱを再履修すること
日本語Ⅲ（J1-7A）	1	1年秋	1	日本語Ⅲを再履修すること
日本語Ⅳ（J1-7B）	1	1年冬	1	日本語Ⅳを再履修すること
日本語Ⅴ（J1-8A）	1	2年春	1	日本語Ⅴを再履修すること
日本語Ⅵ（J1-8B）	1	2年夏	1	日本語Ⅵを再履修すること
日本語Ⅶ（JW-8A）	1	2年春	1	日本語Ⅶを再履修すること

3 『2023年度入学者用 基幹教育 履修要項』112頁より抜粋。

表4 単位の取り方と卒業必要単位数（履修例）⁴

卒業要件 単位数	基本的な単位の取り方		
	1 年前期	1 年後期	2 年前期
2 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修		
4 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	
5 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	日本語Ⅴから 1 単位分履修
6 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵから 2 単位分履修
7 単位 必要な場合	日本語Ⅰ・Ⅱから 2 単位分履修	日本語Ⅲ・Ⅳから 2 単位分履修	日本語Ⅴ・Ⅵ・Ⅶから 3 単位分履修

留学生の第1・第2外国語の選択では、英語・ドイツ語・フランス語・中国語・ロシア語・韓国語・スペイン語の7つの言語と日本語の中から選択できる。なお、日本語を第1・第2外国語に選択した場合は所属学部・学科の卒業単位数を満たすように履修しなければならないとしているが、特例として、所属学部が認める場合は、英語を第1外国語に指定する学部・学科においても英語を第2外国語とし、英語以外の言語を第1外国語にすることができる（表5参照）。また、その場合は、第1外国語と第2外国語のそれぞれの修得単位数を定めず、両者を合わせて12単位を修得することができるとしている。

第1・第2外国語の履修の特例を認める学部は、共創学部（10月入学者のみ）、教育、法、理、医、歯、薬、工、農学部である。文、経済、芸術工については、特例のケースは認めていない。

表5 学部・学科別の第1・第2外国語の指定及び修得単位数⁵

学部		区分	履修言語	1 年次	2 年次以降	修 得 単位数
共創学部	4 月入学者	第 1 外国語	英語	10	2	12
		第 2 外国語	初修外国語	4	0	4
	10月入学者	第 1 外国語	日本語	8	4	12
		第 2 外国語	英語又は初修外国語 ^(※)	4	0	4
文学部 (右の 2 パターンから選択)		第 1 外国語	英語	4	3	7
		第 2 外国語	初修外国語	4	1	5
		第 1 外国語	初修外国語	4	3	7
		第 2 外国語	英語	4	1	5
文学部 (国際コース)		第 1 外国語	英語	10	2	12
		第 2 外国語	初修外国語	4	1	5

4 『2023年度入学者用 基幹教育履修要項』112頁より抜粋。

5 『2023年度入学者用 基幹教育履修要項』102頁より抜粋。

※ 第2外国語は第1外国語で履修する言語を除き、主となる母語以外の言語を履修する。

教育・法・経済学部	第1外国語	英語	4	3	7
	第2外国語	初修外国語	4	1	5
理・医・工・芸術工・農学部	第1外国語	英語	4	4	8
	第2外国語	初修外国語	4	0	4
歯・薬学部	第1外国語	英語	4	6	10
	第2外国語	初修外国語	2	0	2

このような複雑な履修方法のため、従来、学務部基幹教育課と留学生センターの日本語教育部門・留学生指導部門が共同で実施する新入生オリエンテーションで、留学生のみを集めて履修解説を行っている。

2. 4. 受講者数

本年度の「日本語」の延べ受講者数は計70名（前期37名、後期33名）であった。以下に、所属学部別と履修科目別の内訳を示す。

(名)

所属学部	前期（春夏学期）	後期（秋冬学期）
受講者	37	33
延べ受講者	47	47
経済学部	7	1
工学部	10	8
歯学部	1	0
農学部	4	5
文学部	1	1
法学部	2	1
理学部	1	2
共創学部（4月入学生）	1	1
共創学部（10月入学生）	10	14

前期（履修科目別）

科目名	(名)
日本語Ⅰ・日本語Ⅱ	20
日本語Ⅴ・日本語Ⅵ	5
日本語Ⅶ	2
JI-2A・JI-2B	1
JI-3A・JI-3B	2
JI-4A・JI-4B	2
JI-5A・JI-5B	3

後期（履修科目別）

科目名	(名)
日本語Ⅲ・日本語Ⅳ	18
JI-1A・JI-1B	2
JI-2A・JI-2B	1
JI-3A・JI-3B	1
JI-4A・JI-4B	3
JI-5A・JI-5B	1
JI-6A・JI-6B	2

JI-6A・JI-6B	1
JI-8A・JI-8B	1
JK-3A・JK-3B	3
JK-4A・JK-4B	1
JK-5A・JK-5B	1
JK-6A・JK-6B	2
JS-2A・JS-2B	1
JS-3A・JS-3B	1
JS-6A・JS-6B	1

JI-7A・JI-7B	3
JK-1+2A・JK-1+2B	2
JK-3A・JK-3B	2
JK-4A・JK-4B	1
JK-5A・JK-5B	2
JK-6A・JK-6B	1
JK-7A・JK-7B	4
JS-2A・JS-2B	1
JS-3A・JS-3B	1
JS-6A・JS-6B	1
JW-6A・JW-6B	1

2. 5. 時間割

時間割は表6の通りである。前期（春夏学期）、後期（秋冬学期）ともに同様の時間割となっており、各コースとも1週間に2回のクォーター制で開講されている。初級～初中級向け Japanese: Integrated (JI-1～JI-4) については、IUPE 生向けクラスと共創生向けクラスに分割し、きめ細かい指導が行えるようにしている。

表6 時間割⁶

時限	火	水	木	金
1	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4 JW-5 JW-6 JW-7 JW-8／日本語Ⅶ	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4	JI-1 JI-2 JI-3 JI-4 JW-5 JW-6 JW-7 JW-8／日本語Ⅶ
4	JS-2 JS-3 JS-4 JS-5 JS-6 JS-7 JS-8	JK-1+2 JK-3 JK-4 JK-5 JK-6 JK-7 JK-8	JS-2 JS-3 JS-4 JS-5 JS-6 JS-7 JS-8	JK-1+2 JK-3 JK-4 JK-5 JK-6 JK-7 JK-8
5		JI-5 JI-6／日本語Ⅰ・Ⅱ JI-7／日本語Ⅲ・Ⅳ JI-8／日本語Ⅴ・Ⅵ		JI-5 JI-6／日本語Ⅰ・Ⅱ JI-7／日本語Ⅲ・Ⅳ JI-8／日本語Ⅴ・Ⅵ

6 基本的には火曜日と木曜日に開講されている JI-1～JI-4 は IUPE 生を対象としており、水曜日と金曜日に開講されている JI-1～JI-4 は共創学部生と交換留学生を対象としている。

3. おわりに

留学生の中には、様々な理由で日本語の「聴く」、「話す」、「読む」、「書く」の4技能のバランスが良くない学生が少なくない。特にレポートや論文などの文章作成や、日本語による口頭発表など応用面において問題がある学生が散見される。しかし、現在の履修規定では、正規留学生は日本語レベルにかかわらず、特定の科目を受講することになっているため、必ずしも自分の日本語レベルに合ったクラスを受講できる訳ではない。今後は教育効果をさらに高めるため、課題として、学期開始前にプレースメントテスト等を実施し、学生がレベルに合ったクラスを受講できるよう検討を継続していきたい。

また、「日本語」を第2外国語とした場合、大半は2単位或いは4単位しか必要がなくなる。卒業に向けての専門科目の学習は、日本語の力、特に聴く力と書く力がないとかなり難しいため、統合後のカリキュラムでどのように学生の実践的な日本語力の向上を図るべきかが課題である。また、高度な日本語力を持っている学生が、日本語学習のモチベーションを保ちつづけられるように、指導法の工夫もさることながら、履修規定の見直しなどの検討も引き続き必要である。

基幹教育の言語文化基礎科目として開講されている日本語科目の履修登録は、学期が始まる前までに完了する必要がある。したがって、いかに学生に周知すべきかは、引き続き今後の課題となる。

Japanese Training for Advanced Studies¹

大神智春*

1 令和2年度（2020年度）より、英語名を Japanese Training for Advanced Studies に変更した。

②後期

ゼロ初級者への平仮名指導（オンライン）	9月上旬に開始
第1回目オリエンテーション（オンライン）	9月中旬
開講式（オンライン）	9月26日
第2回目オリエンテーション	10月3日
授業開始	10月6日
発表会（オンライン）	2月10日
閉講式（オンライン）	3月1日

前期は日本語未習者の渡日がコース開始日に間に合わず4月はオンライン授業を行うことになった。その後、学習者が4月下旬から5月下旬にかけて順次渡日してきたため、その間はハイブリッド授業を実施した。6月上旬に全員が渡日し常時対面での授業が可能になった。

既習者は当センターが開講する Japanese Academic Courses (JACs) を受講したが、ゼロ初級学習者同様渡日するまではオンラインで受講し、渡日後は対面授業を受講した。

後期については、未習者・既習者ともにすべて対面授業となった。

3) 受講者

前期は文科省の国費外国人留学生のうち北部九州地区の大学へ配属された研究留学生および九州大学に在籍する大学院生・研究生を対象にコースを開講した。後期は国費研究留学生および本校内に所属している大学院生（学内募集生）が受講対象となった。

①前期 25名

前期はゼロ初級者が13名、既修者12名であった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。

出身：アメリカ、アルゼンチン、イラン（2名）、インドネシア（2名）、エジプト、カンボジア、グアテマラ、ケニア、シンガポール、ジンバブエ、ソマリア、ドミニカ共和国、トンガ、パキスタン、パレスチナ、フィリピン、ブラジル（2名）、ベトナム、ベネズエラ、マレーシア、メキシコ、ロシア

進学先：九州大学24名、九州工業大学1名

②後期 6名

後期は4名がゼロ初級者、2名が既習者であった。既習者はJACsで総合コース、漢字コース、会話コースを受講した。6名中2名が学内募集生であった。

出身：アルゼンチン、シリア、ナイジェリア、フィリピン、ベトナム、メキシコ

進学先：九州大学5名、福岡教育大学1名

4) 時間割

以下に日本語ゼロ初級者対象の時間割を示す²。

限	時間	月	火	水	木	金
2	10:30-12:00		I-1		I-1	文化
3	13:00-14:30	I-1	文化	I-1	文化	I-1
4	14:50-16:20	I-1	S-1	K-1	S-1	K-1

3. 授業内容

日本語研修コースではゼロ初級コースを独自開講していることから、本稿ではゼロ初級コースの内容について記載する³。

1) 授業時間数

前期・後期：各16週間

2) 使用教材

I-1	『初級日本語げんき I』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき ワークブック I』	坂野永理他	The Japan Times
I-2	『初級日本語げんき I』『初級日本語げんき II』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき ワークブック I』	坂野永理他	The Japan Times
	『初級日本語教材げんき ワークブック II』	坂野永理他	The Japan Times
K-1	『初級日本語げんき I 読み書き編』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
S-1	『初級日本語げんき I』	坂野永理他	The Japan Times
	プリント教材		
文化	自習作成教材		

3) 授業内容

ゼロ初級レベルのクラスの授業内容は下記のとおりである。

- I-1：日本語学習経験のない学習者を対象に、基礎的な文法や語彙を勉強し、簡単な日常会話ができるようになることを目指す。教科書の第1課から第8課がI-1に該当する。
- I-2：I-1で動詞、形容詞の過去形、非過去の活用を学習した後にI-2に入る。日常会話に必要な基本的文法や語彙を学び、身近な話題で会話ができる日本語能力を養成する。教科書の第9課から第15課が学習範囲である。

2 既習者対象の時間割はJACs (Japanese Academic Courses) の年報を参照。

3 既習者の授業内容についてはJACs (Japanese Academic Courses) の年報を参照。

S-1 : I-1のクラスと連動させながら、テキストの会話部分を補足発展させ、十分に会話の練習を行う。また、日常会話に必要な基礎的な表現を学ぶ。

K-1 : ひらがな・カタカナの定着をはかった後に漢字学習を開始する。文法学習 (I-1) の進捗の後に追う形ですめる。

文化: ①日本の大学や日本社会での生活に適應できる力をつけること、②日本文化と研修生それぞれの国の文化の違いに気づき、異なる価値観を理解すること、③アカデミックな発表の方法を学ぶこと、の3点を目標としている。このクラスでは教室活動の他にフィールドトリップなどの見学や訪問も取り入れている。当コース終了前の最終発表会の準備も含む。

4. 研修生からの評価

毎学期、コース終了前に研修生による評価をアンケート形式で実施している。結果は今後の本コース改善の資料として活用している。以下に評価の結果をまとめる。尚、アンケートでは自由記述形式で研修生にコメントを書いてもらっている項目がある。本稿では代表的なコメントおよび今後の課題として考えさせる意見を抜粋し紹介する。尚、コース評価は閉講式の際に実施している。

①前期

a. 日本語のクラスに関して (ゼロ初級者12名が回答)

* 数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然 よくない	無回答
I-1	11	1	0	0	0	0
S-1	5	3	4	0	0	0
K-1	9	2	1	0	0	0
文化	9	2	1	0	0	0

- All Sensei taught us passionately and helped us a lot to understand about the materials.
- From this speaking class I learned a lot of conversation that can I implement in daily life to survive in Japan.
- The content of the class is good and looking back I have learned over 100+ kanji in a few months, so I thought of it as an achievement.
- From Bunka Class I learned a lot to how to present a presentation in Japanese. The theme of presentation also interesting, to learn more about other countries.
- The guided visits to the shrine and center of disaster prevention were really interesting! I wished we could have more of such activities that put us in the real life in Japan and maybe, learn vocab related to such experiences.

b. もっと勉強したいこと（ゼロ初級者12名が回答、複数回答可）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
6	11	6	8	4	5	5	4	7	7	6

c. 「最終発表会」について（ゼロ初級者12名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
6	5	1	0	0	0

- It summarized all into one larger project. It was a nice recap of everything we studied.
- It was my first time presentation (formal) in Japanese..

d. コースに対する満足度（ゼロ初級者12名、既習者4名回答）

90%-100%	13
80% -89%	1
70% -79%	2
50% -69%	0
49% 以下	0

e. コースへの全体の感想（ゼロ初級者、既修者）

- The course are intensive and all materials from every class are align, this is the good point to help me understand every lesson.
- All the teachers are really great. They all know their subject well and they all work hard to make sure we are able to understand the lessons and do our best. When talking about this course with friends, the thing we most discuss about is how good and friendly all the teachers are.

②後期

a. 日本語のクラスに関して（ゼロ初級者4名の回答）

*数字は人数

クラス名	大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
I-1	4	0	0	0	0	0
S-1	4	0	0	0	0	0
K-1	4	0	0	0	0	0
文化	4	0	0	0	0	0

- It seemed really fast paced at first but it worked out in the end, I learnt a lot in a really short time.
- The course was very well organized and interesting to attend. My Japanese teachers have been very nice and helpful to me when I got into difficulties. I am grateful for everything they have done for me!

- The course was very well organized and interesting to attend. My Japanese teachers have been very nice and helpful to me when I got into difficulties. I am grateful for everything they have done for me.

b. もっと勉強したいこと（未ゼロ初級者4名の回答）

文法	会話	漢字	リスニング	発音	単語	読解	筆記	文化	スピーチ	その他
1	4	3	3	1	1	2	1	1	3	1

c. 「最終発表会」について（ゼロ初級者4名回答）

大変有意義	有意義	どちらとも言えない	それほどよくない	全然よくない	無回答
3	1	0	0	0	0

- It was very important for me, because I am presenting in front of many people and the senseis were watching the result of their hard work with us and I'm also representing my country to Japan with this presentation.
- It helped to improve my speaking and introduced a lot of new words.
- Because it was the chance for me to learn about other cultures that are interesting also.

d. コースに対する満足度（ゼロ初級者4名回答）

90%-100%	4
80% -89%	0
70% -79%	0
50% -69%	0
49% 以下	0

e. コース全体の感想（全員回答）

- The senseis were always taking care of us and classmates were always friendly and hardworking.
- Maybe when the covid pandemic is over, students could have more chances to visit cultural/interesting places during the course to refresh the mind and continue to learn afterward.

5. 令和4年度（2022年度）のまとめ

令和4年度（2022年度）は、新型コロナ感染リスクは依然として高かったが、大学としてはコロナ前の方針に戻り、原則として対面形式で授業を実施することになった。

前期は学生の渡日が学期開始に間に合わなかったため、約1カ月間はオンライン形式、次の約1カ月はハイブリッド形式での授業を実施することになった。5月中旬から5月下旬にかけて学生たちが渡日することになったが、移動期間中は授業を受けることができないため授業内容のフォローアップ

ブに苦勞した。欠席する学生がいる際は授業を録画し学生に視聴を勧めた。しかし、録画の視聴には時間がかかるため実際に視聴する学生は多くはなく、結局は渡日後の対面授業の前後に個別に対応することが多かった。

後期は学期開始時から対面授業を実施することができたが、前期同様新型コロナの感染リスクがあったことから、感染リスクを軽減するため半日程度で行ける見学旅行は実施したが、終日規模の見学旅行は見送ることにした。見学旅行は実際の日本文化を体験する貴重な機会となるが、その機会を多く設けることができなかったのが残念な点であった。

コースやクラスの運営に関しては、令和3年度（2021年度）末に6名の担当教員のうち2名が定年退職となったため、令和4年度（2022年度）から新たな教員2名が運営に参加することになった。そして、新たな教員のアイデアを取り入れつつ新たな運営の在り方を模索することになった。

Japanese Academic Courses (JACs) /

言語文化基礎科目・日本語

Japanese Academic Courses (JACs) /

Fundamental Subjects for Language and Culture, Japanese

脇 坂 真彩子*

楠 木 理 香*

1. はじめに

「Japanese Academic Courses / 言語文化基礎科目・日本語（以下、JACs）」は九州大学伊都キャンパスで開講される単位取得を目指す学部留学生向けの日本語コースである。総合（I コース）、漢字（K コース）、会話（S コース）、作文（W コース）の4つのコースから構成され、入門から上級まで8段階の幅広いレベルのクラスが展開されている。現在、九州大学の学部正規留学生（共創学部および農学部・工学部学士課程国際コース：IUPE に所属する学生を含む）、留学生センターが提供するプログラム（Japan in Today's World Program：JTW、日本語・日本文化研修コース：JLCC、日本語研修コース：JTAS）の参加学生、大学間・部局間交流協定に基づく交換留学制度を通じて留学し各学部所属する交換留学生が、本コースを受講している。以下に、2023年度（令和5年度）の実施状況を報告する。

2. JACs の概要

2. 1. コースの編成

本コースは総合（I コース）、漢字（K コース）、会話（S コース）、作文（W コース）の4つのコースから成る。表1は2023年度春学期（Quarter 1）・夏学期（Quarter 2）、表2は秋学期（Quarter 3）・冬学期（Quarter 4）のコース編成を示している。1コマ90分の構成であり、クォーター制に基づき、各クォーターで週に2回を7.5週、計15回授業が行われる。括弧内の数字はクラス数を示している。なお、各クラスの科目名は留学生センターと基幹教育で異なっているが、本稿では留学生センターでの科目名を使用する。科目名の一覧は本稿稿末を参照されたい。

* 九州大学留学生センター准教授

表1 コース編成（2023年度春夏学期）

レベル	総合（I コース）	漢字（K コース）	会話（S コース）	作文（W コース）
上 級	JI-8（1）	JK-8（1）	JS-8（1）	JW-8（1）
上 級 入 門	JI-7（1）	JK-7（1）	JS-7（1）	JW-7（1）
中 級 2	JI-6（3）	JK-6（1）	JS-6（1）	JW-6（1）
中 級 1	JI-5（2）	JK-5（1）	JS-5（1）	JW-5（1）
中 級 入 門	JI-4（2）	JK-4（1）	JS-4（1）	
初 級 2	JI-3（2）	JK-3（2）	JS-3（1）	
初 級 1	JI-2（2）	JK-1+2（1）	JS-2（1）	
入 門	JI-1（1）			

表2 コース編成（2023年度秋冬学期）

レベル	総合（I コース）	漢字（K コース）	会話（S コース）	作文（W コース）
上 級	JI-8（1）	JK-8（1）	JS-8（不開講）	JW-8（不開講）
上 級 入 門	JI-7（3）	JK-7（1）	JS-7（1）	JW-7（1）
中 級 2	JI-6（1）	JK-6（1）	JS-6（1）	JW-6（1）
中 級 1	JI-5（2）	JK-5（1）	JS-5（1）	JW-5（1）
中 級 入 門	JI-4（2）	JK-4（1）	JS-4（1）	
初 級 2	JI-3（2）	JK-3（2）	JS-3（1）	
初 級 1	JI-2（2）	JK-1+2（2）	JS-2（1）	
入 門	JI-1（2）			

2. 2. 授業の実施方針

基幹教育の授業方針¹に沿って、以下のような方針で授業を実施した。

【春夏学期のJACsの授業方針】

全クラスを初回から対面で実施する。ただし、緊急時にオンライン授業への切り替えがスムーズに行えるように、春学期（Q1）は、4月中に1回と必要に応じてさらにもう1回オンライン授業を取り入れる。夏学期（Q2）は、緊急時にオンライン授業の対応に不安があるクラスのみ、オンライン授業を1-2回取り入れる。

【秋冬学期のJACsの授業方針】

全クラスを初回から対面で実施する。ただし、緊急時にオンライン授業への切り替えがスムーズに行えるように、ZoomのURLは初回の授業で必ず学生に知らせ、緊急時のオンラインへの切り替えが不安なクラスのみ、各クォーターにつきオンライン授業を1-2回取り入れる。

1 令和5年度以降の基幹教育科目の授業実施ガイドラインでは、新型コロナウイルス感染症をはじめとした様々な感染症への対策を行いつつ、受講者数は教室の収容人数を上限として、対面授業の実施を原則とするという方針であった。

2. 3. 使用教材

各クラスでの使用教材は表3の通りである。

表3 各クラスでの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
JI-1	『初級日本語げんきⅠ（第3版）』	JK-1+2	『初級日本語げんきⅠ（第3版）』
JI-2	『初級日本語げんきⅠ，Ⅱ（第3版）』		『Essential Japanese Kanji vol.1』
JI-3	『初級日本語げんきⅡ（第3版）』	JK-3	『Basic Kanji Book vol.1』
JI-4	『中級へ行こう（第2版）』	JK-4	『Basic Kanji Book vol.1、vol.2』
JI-5	『中級を学ぼう（中級前期）』	JK-5	『Basic Kanji Book vol.2』
JI-6	『中級を学ぼう（中級中期）』	JK-6	『上級へのとびらきたえよう漢字力』
JI-7	『日本語5つのとびら TOBIRA 中上級編』	JK-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
JI-8	自主作成教材を使用（Q1&2） 『留学生のための時代を読み解く上級日本語（第3版）』（Q3&4）	JK-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
会話	使用教材	作文	使用教材
JS-2	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	JW-5	『おしゃべりしながら書くことを楽しむ中級作文』
JS-3	『聞く・考える・話す 留学生のための初級日本語会話』	JW-6	『小論文の12のステップ』
JS-4	『会話に挑戦！中級前期からの日本語ロールプレイ』	JW-7	『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』
JS-5	自主作成教材を使用	JW-8	『改訂版 大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』
JS-6	『日本語上級話者への道』		
JS-7	自主作成教材を使用		
JS-8	自主作成教材を使用		

2. 4. 学生区分／所属別の受講可能コース

JACsでは学生区分と所属によって受講できるコースやレベルに制限がある。表4に学生区分／所属別の受講可能コースを示す。表内の「○」はプレースメントテストを受験した上で、そのコースを受講できることを示し、「×」はそのコースが受講できないことを示している。学部にも所属する正規留学生は特定のクラスを受講することになっているため、表内にそのクラスを記している。

表4 受講可能コース一覧

学生区分／所属	総合コース	漢字コース	会話コース	作文コース
留学生センター生（JTW、JLCC、研修）	○	○	○	○
学部所属交換留学生	○	○	○	○
農学部・工学部国際コース（IUPE）1年生	○	○	×	×
農学部・工学部国際コース（IUPE）2年生	○	×	×	×
共創学部（秋入学）	○	○	○	○
学部正規留学生 （共創学部秋入学・IUPE以外の学部生）	J1-6（Q1&2） J1-7（Q3&4） J1-8（Q1&2） JW-8（Q1&2）	×	×	×

2. 5. 開講日程とプレースメントテスト

2023年度の各クォーターの開講日程は表5の通りである。

表5 授業の開講スケジュール

クォーター	開講期間
春学期（Quarter 1）	2023年4月11日 ～ 2023年6月7日
夏学期（Quarter 2）	2023年6月13日 ～ 2023年8月2日
秋学期（Quarter 3）	2023年10月5日 ～ 2023年12月1日
冬学期（Quarter 4）	2023年12月6日 ～ 2024年2月8日

JACsの受講には受講希望者本人が春学期（Q1）と秋学期（Q3）の開始前に、オンラインで受講申し込みとプレースメントテストの受験を完了する必要がある。加えて、漢字コースの受講希望者には筆記による漢字テスト（60分）、会話コースの受講希望者には担当教員との一対一のインタビューテスト（10分）、作文コースの受講希望者には作文テスト（40分）を初回授業で実施し、これらの結果から、総合的に最終的なクラスを決定する。表6に2023年度の受講登録とプレースメントテストの日程を示す。

表6 2023年度の受講登録・プレースメントテストの日程

クォーター	オンラインシステムによる受講登録・プレースメントテスト	漢字テスト（60分）	インタビューテスト（約10分／人）	作文テスト（40分）
春学期（Q1）	2023年3月24日～4月6日	4月12日	4月11日	4月12日
秋学期（Q3）	2023年9月19日～9月29日	10月6日	10月5日	10月6日

3. 履修者

2023年度春学期（Q1）の最終履修者数は160名（延べ324名）、秋学期（Q3）の最終履修者数は、150

名（延べ289名）であった。昨年度と比べると、春学期は24名（延べ54名）増加し、秋学期は20名（延べ40名）減少した。以下3. 1. にクラス別履修者数、3. 2. に出身地域別の履修者数、3. 3. に身分別の履修者数の内訳を示す。

3. 1. 履修者の内訳（クラス別）

春学期（Q1）と秋学期（Q3）のクラス別履修者数を表7と表8に示す。括弧内の数字はクラス数を示している。

表7 2023年度春学期（Q1）クラス別履修者数（延べ履修者数）

レベル	総合コース		漢字コース		会話コース		作文コース	
入門	JI-1 (1)	13	JK-1+2 (1)	16				
初級 1	JI-2 (2)	28			JS-2 (1)	13		
初級 2	JI-3 (2)	11	JK-3 (2)	32	JS-3 (1)	9		
中級入門	JI-4 (2)	21	JK-4 (1)	9	JS-4 (1)	13		
中級 1	JI-5 (2)	19	JK-5 (1)	18	JS-5 (1)	13	JW-5 (1)	5
中級 2	JI-6 (3)	35	JK-6 (1)	12	JS-6 (1)	8	JW-6 (1)	9
上級入門	JI-7 (1)	5	JK-7 (1)	8	JS-7 (1)	5	JW-7 (1)	5
上級	JI-8 (1)	10	JK-8 (1)	2	JS-8 (1)	3	JW-8 (1)	2
総計 324名								

表8 2023年度秋学期（Q3）クラス別履修者数（延べ履修者数）

レベル	総合コース		会話コース		漢字コース		作文コース	
入門	JI-1 (2)	28			JK-1+2 (2)	37		
初級 1	JI-2 (2)	13	JS-2 (1)	8				
初級 2	JI-3 (2)	23	JS-3 (1)	10	JK-3 (2)	15		
中級入門	JI-4 (2)	22	JS-4 (1)	11	JK-4 (1)	7		
中級 1	JI-5 (1)	13	JS-5 (1)	9	JK-5 (1)	14	JW-5 (1)	3
中級 2	JI-6 (1)	8	JS-6 (1)	8	JK-6 (1)	5	JW-6 (1)	4
上級入門	JI-7 (3)	29	JS-7 (1)	4	JK-7 (1)	7	JW-7 (1)	3
上級	JI-8 (1)	3	JS-8 (不開講)		JK-8 (1)	5	JW-8 (不開講)	
総計 289名								

3. 2. 履修者の内訳（出身地域別）

表9は春学期（Q1）と秋学期（Q3）の履修者を出身地域・国籍別にまとめたものである。

表9 出身地域別の履修者数

アジア	春学期	秋学期
中華人民共和国	24	25
大韓民国	20	13
インドネシア共和国	9	13
台湾	8	10
香港	6	－
シンガポール共和国	3	2
タイ王国	3	5
フィリピン共和国	3	5
インド共和国	2	4
ベトナム社会主義共和国	2	1
マレーシア	2	2
スリランカ民主社会主義共和国	1	1
日本国	1	4
パキスタン・イスラム共和国	1	1
バングラデシュ人民共和国	1	1
ミャンマー連邦共和国	1	1
小計	87名	88名

中東	春学期	秋学期
イスラエル国	4	4
イラン・イスラム共和国	1	－
トルコ共和国	1	1
小計	6名	5名

オセアニア	春学期	秋学期
オーストラリア連邦	1	1
小計	1名	1名

アフリカ	春学期	秋学期
エジプト・アラブ共和国	2	2
カメルーン共和国	1	－
チュニジア共和国	1	－
小計	4名	2名

欧州	春学期	秋学期
フランス共和国	11	7
英国	8	8
ドイツ連邦共和国	7	12
スウェーデン王国	4	4
イタリア共和国	2	－
ウズベキスタン共和国	2	3
ルーマニア	2	－
アイスランド	1	－
オランダ王国	1	3
チェコ共和国	1	－
ノルウェー王国	1	1
ブルガリア共和国	1	1
ロシア連邦	1	2
オーストリア共和国	－	1
小計	42名	42名

北米	春学期	秋学期
アメリカ合衆国	13	7
カナダ	－	2
小計	13名	9名

中南米	春学期	秋学期
ブラジル連邦共和国	2	2
メキシコ合衆国	2	1
グアテマラ共和国	1	－
ドミニカ共和国	1	－
ペルー共和国	1	－
小計	7名	3名
計	160名	150名

3. 3. 履修者の内訳（身分別）

表10は、春学期（Q1）と秋学期（Q3）の身分別の履修者数を学期ごとにまとめたものである。

表10 身分別の履修者数

留学生センター生	春学期	秋学期
Japan in Today's World (JTW)	56	47
日本語・日本文化研修コース (JLCC)	12	13
日本語研修コース (JTAS)	10	1
小計	78名	61名
学部正規留学生	春学期	秋学期
工学部国際コース (IUPE)	16	30
農学部国際コース (IUPE)	3	15
共創学部 秋入学	10	14
共創学部 春入学	1	1
その他の学部正規留学生	26	18
小計	56名	78名
学部所属交換留学生	春学期	秋学期
共創学部	9	3
文学部	7	—
工学部	4	3
農学部	3	1
経済学部	1	—
法学部	1	2
理学部	1	1
教育学部	—	1
小計	26名	11名
総計	160名	150名

4. 2023年度に行った改善

4. 1. 期末試験日に欠席した学生への対応

昨年度、JACs受講生がさまざまな理由で期末試験当日に欠席し、その理由が基幹教育履修規定の公欠にあらず、基幹教育で追試の際に求められる診断書もなかったため、対応に苦慮した。そこで、試験当日に学生が欠席した際の対応を関係者と検討し、以下のように整理した。

- 1) 試験日に学生が欠席し、追試を希望する場合は、学生本人が教員に申し出る。
- 2) 担当教員は欠席の理由が公欠に該当するものかを確認する。
 - 2.1) 欠席の理由が明らかに公欠に当たらない場合は、追試を受験することはできない。
 - 2.2) 欠席の理由が公欠にあたる場合は追試を実施する。
 - 2.3) 欠席の理由が公欠には該当しないが、考慮すべき理由である場合は以下のように対応する。

2.3.1) 学生の所属コース／プログラム関係者に、学生の状況（欠席理由や進級・進学のために単位取得が必須であるなど）を確認・相談する。

2.3.2) クラス担当者と相談の上、2.3.1) の内容を考慮して追試の有無を決定する。

- 3) 追試は、各クォーター期間終了直後の決められた日に実施する。追試日に参加できなかった学生には再試験は行わず、期末試験は未受験として成績を算出する。（ただし、公欠にあたる理由で追試日に試験を受けられなかった学生はこの限りでない。）

なお、追試の実施日時は授業担当教員と学生が相談して決め、基本的に授業担当教員が試験監督を務める。また、できるだけ試験当日の欠席者を減らすため、期末試験実施期間前に、JACs オフィスから全受講生に期末試験に係る注意喚起を一斉メールで通知することとした。

4. 2. 学部所属交換留学生の JACs 履修

従来、大学間及び部局間交流協定に基づき九州大学の各学部で留学する交換留学生には、春学期（Q1）と秋学期（Q3）の開始前に国際部留学課より九州大学で開講される全ての日本語コースを案内し、学生本人が開講期間や授業内容、単位認定の可否などを検討した上で、受講申し込みを行うこととしていた。しかし、近年の交換留学生数の増加により、今後 JACs 受講者が定員をオーバーする可能性が出てきた。この対策として、2023年度秋学期から、九州大学で日本語科目の単位取得が必要な学生のみ JACs の受講を認め、日本語の単位取得が不要な学生には基本的に日本語課外補講コース Japanese Training Courses (JTCs) を受講してもらうことにした。これに伴い、学期開始前の学生への通知は JTCs を中心とした内容に変更し、JACs の履修を希望する学生には国際部留学課で日本語の単位取得の必要性を確認した上で、単位取得が必須の学生のみ JACs の受講手続きについて案内するという手順に変更した。

4. 3. JACs 学生用および教師用受講管理システム

2023年度は以下の3点について、システムの改修を行った。

- 1) 留学生センターのサーバーの耐用年数の超過に伴い、新規サーバーの購入と留学生センターで使用する全てのサーバー入替えを5月15日～5月28日に行った。
- 2) JACs 学生用システムで、学生番号の入力と訂正がスムーズにできるように改修した。
- 3) JACs 教師用受講管理システムの「受講証明書発行」機能のエラーを修復した。

4. 4. 共創学部正規留学生の日本語科目履修免除

2023年度10月以降に入学した共創学部正規留学生の日本語科目履修については、工学部・農学部学士課程国際コースの正規留学生と同様に、JACs プレースメントテストの結果、JACs 科目受講の必要がないと判断された場合には、成績は「R」認定されることとなった。手続きとしては、プレースメントテストに基づくレベル判定後、JACs コーディネーターが所定の用紙に JACs で履修免除するコースに「○」をつけ、学部基幹教育に提出し、日本語科目履修免除を適用する。これにより、2022年10

月入学の工学部・農学部学士課程国際コースの学生の履修免除の際に行われているプロセスと、共創学部正規留学生の履修免除が同じ方法となり、統一されることになった。

5. 今後の課題

5. 1. 学部正規留学生の受講方法の見直し

現在、学部正規留学生（工学部・農学部学士課程国際コース生と共創学部10月入学を除く）はプレースメントテストを受験することなく、特定のクラスを受講することになっている。これは学部に入学者の留学生の日本語レベルが均一であると想定されてのことである。しかし、実際には学生の日本語レベルのばらつきが大きく、受講するクラスのレベルが学生のレベルに合っていないケースがある。そのような場合には、これまで、個別にプレースメントテストを実施し、指定されたクラスよりも低いレベルのクラスを受講させたり、これらの学生が受講するクラスの初回に特別なテストを実施して、クラス内の学生のレベル差ができるだけ小さくなるようにするなどの工夫を行ってきた。また、担当教員が受講生の様子を見て、彼らのレベルやニーズにあった日本語教育を提供できるよう授業内容を調整しながら授業を行なっている。これらにより状況は改善されているものの、根本的な解決には至っていない。本来であれば、学生が自分の日本語レベルにあったクラスを受講するのが望ましい。他の身分／所属の学生と同様に、学期開始前にプレースメントテストを実施し、各学生のレベルにあったコースを受講してもらえるよう今後も働きかけていきたい。

5. 2. 共創学部正規留学生の日本語科目履修免除における判定時期等の検討

4. 4. で述べたように、日本語上級者の日本語履修免除の規定に関して、工学部・農学部学士課程国際コースの学生と共創学部正規留学生で、2023年10月より同様の基準で履修免除の判断ができるようになったことは大きな改善点であったと言える。しかしながら、秋学期にこの日本語履修免除に当てはまるケースが共創学部正規留学生に1名見られ、その手続きを初めて進める中で見えてきた問題点もあった。それは、工学部・農学部学士課程国際コースの学生と、共創学部正規留学生（秋入学）のJACs受講可能コース²や履修単位数に違いがあることから生じるものである。共創学部生はJACsの全4コースが受講可能である上、大学在学4年間をかけて12単位を取得すれば良いため、入学時点でどのコースの何単位分を履修免除認定するべきかの判断が難しいことがわかった。同様の困難点は、1年時と2年時にJACsの総合コースと漢字コースのみを履修することになっている工学部・農学部学士課程国際コースの学生の履修免除認定時には、見られなかったものである。今後も日本語履修免除に当たる学生は増加してくると思われるため、今回問題となった点も含めて、さらに共創学部正規留学生の日本語科目履修免除の手続きや方法、時期に関して、改善に向けて検討していきたい。

2 本稿表4参照

5. 3. 問い合わせ対応の効率化

オンラインシステムによる受講登録開始期間後から授業開始後約2週間は、留学生からの問い合わせや、基幹教育担当者やJACs 授業担当教員からの依頼が集中する。記録を残した分だけでも、Q1(春学期)は受講登録期間に42件、クラス分け後約2週間に12件、Q3(秋学期)は受講登録開始前後に42件、クラス分け後約2週間に14件の問い合わせがあった。問い合わせの内訳は、受講登録期間中はJACs システムの操作に関わることや、履修単位に関する質問などが多数を占める。クラス分け後の問い合わせは、締切後の受講登録の可否や、クラス移動(上/下のクラス、別の曜日の同じレベルのクラスへの移動)、履修中止などに関するものが大半である。こうした問い合わせには、コーディネーターと教務補佐が一件ずつメールで対応しているが、この時期はJACs 担当教員の連絡会議や授業準備などに追われることもあり、大きな負担となっているのが実情である。問い合わせ内容は、緊急対応の必要なものもあるが、大半はすぐに返答できるものである。そのため、今後問い合わせデータをまとめてQ&Aを作成して履修登録者に公開したり、AIによる自動応答サービスを開発したりするなどして対応の効率化を図り、JACs 運営者の負担を軽減したい。

5. 4. 合理的配慮が必要な学生への対応

ここ数年、JACs 科目の履修にあたり、合理的配慮を求める学生が増加している。合理的配慮が必要な学生には基本的に以下のプロセスで配慮が行われる。まず、合理的配慮を希望する学生本人が、九州大学のフローに沿って、大学入学時または交換留学申請の際に、配慮の申請を行う。その後、九州大学のインクルージョン支援推進室で合理的配慮要望書が作成され、配慮内容が決定された後、学部または受け入れプログラム担当者から、JACs に正式な配慮要請が届く。JACs コーディネーターが授業担当教員に学生からの要望内容を伝え、授業内容や授業活動の形態、クイズや期末試験の実施内容などを考慮して、どのような配慮が可能かを検討する。学生本人とも交渉した上で、具体的な配慮内容を正式に回答し、それに沿って配慮を行う。しかし、このプロセスには主に以下のような問題がある。

1. 学生の申請から担当教員に正式な配慮要請が届くまでに長い時間を要し、学期の終盤になってようやく配慮要請が届くなど、適切なタイミングで配慮が実施されていると言い難い。また、このような場合、期末試験直前になって担当教員が配慮を迫られるケースも発生している。
2. 現在、上記のプロセスを経て回答した内容に基づいて授業での配慮を行っているが、学生が事前に想定できなかった内容について、追加の要望を非公式に担当教員に要望するケースが多数見られ、担当教員にとって大きな負担となっている。また、留学生にとっては、本学での合理的配慮のプロセスが母校における扱いと大きく異なることによりフラストレーションが起こる場合もある。
3. JACsでは学期開始前にプレースメントテストを実施しているが、合理的配慮の申請は学期開始後に行われるため、プレースメントテストには配慮が間に合わない。これにより、春学期には配慮なしでテストを受けた学生から、クラス分けについての不満が学期開始後に寄せられたケースもあったため、2023年度秋学期は、インクルージョンオフィスとの協議を重ねた上で、本人からの

申し出があれば学期前に合理的配慮の申請を行うことが可能となった。その結果、本来オンラインで行われる JACs のプレースメントテストを数名対面で実施したが、テスト日の設定や十分なテスト時間及び試験監督の確保など、今後についてはまだ問題点も多い。

今後、合理的配慮を要する学生は増加していくと思われる。学生のプライバシーへの配慮から、担当教員への通知までに時間がかかるのはある程度仕方がないが、合理的配慮を要する学生が学期初めから安心して授業を受けられ、担当教員が安定的な授業運営ができるよう、改善する必要があるだろう。

5. 5. 日本にルーツを持つ学習者への対応

ここ数年、親や祖父母が日本人であったり、幼少期の一定期間を日本で過ごした経験があるなど、日本にルーツを持つ学生の履修が徐々に増えてきている。これらの学生は、インターナショナルスクールや日本人学校、日本語ができる周囲の人々との関わり、インターネットやアニメ・漫画などから日本語を学んできている。彼らの日本語能力は4技能にバラつきがあり、口頭コミュニケーション能力に比べ、読み書き能力が低い場合が多い。時には、会話能力は極めて高い一方で、読み書きの能力が著しく低い学生もいる。

JACs が提供する日本語教育は、外国語・第二言語として日本語を学ぶ留学生を対象としたものであり、当初は上記のような学習者の受講は想定していなかった。そのため、このような学生がいた場合には JACs の枠組みの中で学生が最大限に日本語能力を高めていけるように、学生本人および関係教員と相談の上、特別対応をしてきた。これまでに行なった対応から浮かび上がってきた課題を以下に記す。

- 1) 彼らの中には自分自身の文章表現力や漢字能力が低いことを自覚し、自ら低いレベルのクラスの受講を希望する学生がいる一方で、自分の日本語力をネイティブレベルであると評価し、留学生向けの日本語クラスの受講に抵抗感を抱く学生もいる。また、プレースメントテストの結果、自己評価よりも低いレベルに入ることに嫌悪感を示す学生もいる。彼らの日本人としてのアイデンティティを尊重し、プライドを傷つけないような配慮が必要であると思われる。
- 2) 通常のクラス分けでは、多くの場合、漢字コース (K) と作文コース (W) のレベルは総合コース (I) のレベル±1の範囲内に納めるのが基本である。しかし、口頭コミュニケーション能力と読み書き能力の差が著しく大きい場合には、漢字コースや作文コースで総合コースよりも2レベル以上低いコースに入ることを認めたり、総合コースや会話コースの受講を免除し、漢字コースや作文コースのみを受講してもらうなどの対応をしてきた。しかし、総合コースのレベルが漢字コースや作文コースのレベルよりも2レベル以上高い場合、総合クラスでの読解問題で漢字が読めず、教員が個別に特別対応を迫られる場合もあるため、クラス分けの際はコース間のレベル差を慎重に判断する必要がある。
- 3) 彼らは、外国語・第二言語として日本語教育を受けた経験がないため、日本語教育で用いられる文法用語が理解できなかったり、授業の進め方に戸惑ったりすることがある。他の学生に配慮しつつ、これらの学生がスムーズに授業内容を理解できるように工夫が必要であると思われる。ま

た、このような学生が日本語能力をバランスよく高めていくために、教師が教室内外でどのようにサポートできるかを考える必要がある。

今後、多様な背景を持つ学習者がさらに増えることが予想される。JACsがどのような学生を対象に日本語教育を行い、どこまでサポートすべきなのかを引き続きしっかりと議論していく必要がある。

6. おわりに

2023年度は一部の短期留学プログラムを除き、外国人留学生の受け入れがコロナ禍前の水準に回復し、JACs 全体の履修者数も2019年を上回った。また、5月8日から新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが5類感染症に移行したことで、ようやく厳しい感染対策や濃厚接触者への対応などに追われずに教室での対面授業を行うことができるようになった。インフルエンザや新型コロナウイルスの流行などの緊急時にオンライン授業に切り替えられるように備え、感染者発生時には一時的にオンライン授業へ変更する必要があったものの、学期開始時から終了まで基本的に対面で授業を行うことができ、教室に活気が戻ってきた。

コロナ禍を経て ICT や AI の進化が加速し、とくに Chat GPT などの対話型 AI は語学教育に大きな影響を与えている。これらを上手く活用し教育効果をさらに高めていくために、JACs における日本語教育はどのように取り組んでいくべきかを今後しっかりと考えていく必要がある。コロナ禍に培ったオンライン授業やハイブリット授業でのスキルや経験を対面授業に融合しつつ、教育環境の変化に対応し、より柔軟に質の高い教育を提供できるよう授業改善に努めていきたい。

参考文献

- 脇坂真彩子 (2018) 「九州大学留学生のための日本語コース (JACs)」『九州大学留学生センター紀要』 26, 83-88.
- 脇坂真彩子 (2019) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 27, 79-90.
- 脇坂真彩子 (2020) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 28, 83-94.
- 脇坂真彩子 (2021) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 29, 39-51.
- 脇坂真彩子 (2022) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 30, 17-30.
- 脇坂真彩子・柴田あづさ (2023) 「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」『九州大学留学生センター紀要』 31, 79-93.

付録「Japanese Academic Courses (JACs) / 言語文化基礎科目・日本語」科目名一覧

留学生センター生	共創学部秋入学生・IUPE生・学部所属交換留学生		学部正規留学生
科目名	シラバス上の科目名	略称	シラバス上の科目名
JI-1	Japanese: Integrated 1 A	JI-1A	
	Japanese: Integrated 1 B	JI-1B	
JI-2	Japanese: Integrated 2 A	JI-2A	
	Japanese: Integrated 2 B	JI-2B	
JI-3	Japanese: Integrated 3 A	JI-3A	
	Japanese: Integrated 3 B	JI-3B	
JI-4	Japanese: Integrated 4 A	JI-4A	
	Japanese: Integrated 4 B	JI-4B	
JI-5	Japanese: Integrated 5 A	JI-5A	
	Japanese: Integrated 5 B	JI-5B	
JI-6	Japanese: Integrated 6 A	JI-6A	日本語Ⅰ (Q1)
	Japanese: Integrated 6 B	JI-6B	日本語Ⅱ (Q2)
JI-7	Japanese: Integrated 7 A	JI-7A	日本語Ⅲ (Q3)
	Japanese: Integrated 7 B	JI-7B	日本語Ⅳ (Q4)
JI-8	Japanese: Integrated 8 A	JI-8A	日本語Ⅴ (Q1)
	Japanese: Integrated 8 B	JI-8B	日本語Ⅵ (Q2)
JK-1+2	Japanese: Kanji 1+2 A	JK-1+2A	
	Japanese: Kanji 1+2 B	JK-1+2B	
JK-3	Japanese: Kanji 3 A	JK-3A	
	Japanese: Kanji 3 B	JK-3B	
JK-4	Japanese: Kanji 4 A	JK-4A	
	Japanese: Kanji 4 B	JK-4B	
JK-5	Japanese: Kanji 5 A	JK-5A	
	Japanese: Kanji 5 B	JK-5B	
JK-6	Japanese: Kanji 6 A	JK-6A	
	Japanese: Kanji 6 B	JK-6B	
JK-7	Japanese: Kanji 7 A	JK-7A	
	Japanese: Kanji 7 B	JK-7B	
JK-8	Japanese: Kanji 8 A	JK-8A	
	Japanese: Kanji 8 B	JK-8B	
JS-2	Japanese: Speaking 2 A	JS-2A	
	Japanese: Speaking 2 B	JS-2B	
JS-3	Japanese: Speaking 3 A	JS-3A	
	Japanese: Speaking 3 B	JS-3B	
JS-4	Japanese: Speaking 4 A	JS-4A	
	Japanese: Speaking 4 B	JS-4B	
JS-5	Japanese: Speaking 5 A	JS-5A	
	Japanese: Speaking 5 B	JS-5B	
JS-6	Japanese: Speaking 6 A	JS-6A	
	Japanese: Speaking 6 B	JS-6B	
JS-7	Japanese: Speaking 7 A	JS-7A	
	Japanese: Speaking 7 B	JS-7B	
JS-8	Japanese: Speaking 8 A	JS-8A	
	Japanese: Speaking 8 B	JS-8B	
JW-5	Japanese: Writing 5 A	JW-5A	
	Japanese: Writing 5 B	JW-5B	
JW-6	Japanese: Writing 6 A	JW-6A	
	Japanese: Writing 6 B	JW-6B	
JW-7	Japanese: Writing 7 A	JW-7A	
	Japanese: Writing 7 B	JW-7B	
JW-8	Japanese: Writing 8 A	JW-8A	日本語Ⅶ (Q1)
	Japanese: Writing 8 B	JW-8B	

2023年度 伊都キャンパス・病院（馬出）キャンパス 日本語補講コース

Japanese Training Courses (JTCs)

柴 田 あづさ*

1. はじめに

JTCs (Japanese Training Course) は、伊都地区および病院（馬出）地区の語学の単位を卒業単位として要さない大学院所属の留学生（修士・博士・研究生）と交換留学生のための日本語補講コースである。大学院の留学生は各所属で研究活動を行う一方、日本での生活日本語の習得が必要であり、補講科目として、自由選択でJTCsを受講することができる。本学の留学生の中には、文系の大学院を中心に論文を日本語で書くような高い日本語力を持つ者がいる一方、英語で入学を許可され英語で研究活動を行う留学生も多数存在する。後者の場合、大学内では英語のみで過ごすことは可能だが、日本社会での学外生活や研究室での人間関係構築には、最低限の日本語力が必要となる。このような留学生のために、セーフティネットとしてJTCsが開講されている。JTCsは、例年300～400名前後の受講生を受け入れ、九州大学内で最大規模の日本語コースとなっている。

2. JTCs のコース構成

2. 1. コースの期間

令和5年度（2023年度）のコースの募集、及び、開講期間は以下、表1の通りである。

表1 2023年度開講スケジュール

	前期	後期
受講申し込み	4月12日（水）～4月17日（月）	10月11日（水）～10月16日（月）
オンラインテスト		
レベル結果通知	4月19日（水）	10月18日（水）
クラス選択	4月20日（木）～4月22日（土）	10月19日（木）～10月21日（土）
授業開始～授業終了	5月9日（火）～7月14日（金）	10月2日（木）～1月26日（金）

JTCsの受講を希望する者は、表1にある期間にオンラインで受講申請を行い、テストを受験する。オンラインテストは、日本語1の希望者は登録のみとし、日本語2以上の希望者には、文法・読解・

* 九州大学留学生センター准教授

聴解の3つのテストを課している。テスト結果はオンラインシステムにより処理され、受講者はJ1からJ7までの7段階にレベル分けされる。レベルの結果は、システムからメールで通知される。その後、クラス登録期間にオンラインシステムに入り、受講者は自分が受講したいクラスを選択する。

2. 2. コースの構成

表2と表3には、今年度の前期と後期にJTCsで開講されたコースの一覧が示されている。前期には日本語1から日本語7までの7レベルが開講され、後期には日本語1から日本語7に日本語1+を追加した8レベルが開講された。

表2 2023年度前期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (Upper Intermediate)	日本語7 (Japanese7)	留学生のためのケースで学ぶ日本語	1
中級中期 (Mid-Intermediate)	日本語6 (Japanese6)	中級を学ぼう 中級前期	2
初中級 (Pre-Intermediate)	日本語5 (Japanese5)	中級へ行こう	3
初級後期 (Upper Elementary)	日本語4 (Japanese4)	GENKI II	4
初級中期 (Mid-Elementary)	日本語3 (Japanese3)		3
初級前期 (Early Elementary)	日本語2 (Japanese2)	GENKI I	3
入門 (Beginner)	日本語1 (Japanese1)		5

表3 2023年度後期の授業構成

レベル基準	レベル名称	教科書	クラス数
中級後半 (Upper Intermediate)	日本語7 (Japanese7)	留学生のためのケースで学ぶ日本語	1
中級中期 (Mid-Intermediate)	日本語6 (Japanese6)	中級を学ぼう 中級前期	2
初中級 (Pre-Intermediate)	日本語5 (Japanese5)	中級へ行こう	3
初級後期 (Upper Elementary)	日本語4 (Japanese4)	GENKI II	3
初級中期 (Mid-Elementary)	日本語3 (Japanese3)		
初級前期 (Early Elementary)	日本語2 (Japanese2)	GENKI I	3
入門2 (Beginner2)	日本語1+ (Japanese1+)		1
入門1 (Beginner1)	日本語1 (Japanese1)		5

3. 受講者数、及び、受講者の内訳

3. 1. 受講者数

表4は、2023年度の前期および後期における受講者数を示している。前期には213名が申請し、そのうち206名がプレースメントテストによってクラスに割り当てられたが、実際のクラス開始時の受講者は179名であった。一方で、後期には251名が申請し、244名がプレースメントによりクラスに割り当てられ、最終的に206名が受講した。

前期			後期		
申請者	プレス	受講者	申請者	プレス	受講者
213	206	179	251	244	206

表5は前期の各クラスの人数を、表6は後期の各クラスの人数を示している。JTCsの授業は基本的に伊都キャンパスで実施されるが、病院（馬出）地区の受講生への対応のため、一部のクラスはZoomを利用したオンライン形式で開講されている。

日本語 7	6								
日本語 6 a	10	日本語 6 b	8						
日本語 5 a	4	日本語 5 b 〈Online〉	9	日本語 5 c	7				
日本語 4 a	14	日本語 4 b	13	日本語 4 c 〈Online〉	5	日本語 4 d 〈Online〉	6		
日本語 3 a	6	日本語 3 b 〈Online〉	12	日本語 3 c	3				
日本語 2 a 〈Online〉	7	日本語 2 b	7	日本語 2 c	9				
日本語 1 a	11	日本語 1 b	16	日本語 1 c 〈Online〉	7	日本語 1 d	9	日本語 1 e	10

日本語 7	10								
日本語 6 a	9	日本語 6 b	9						
日本語 5 a	15	日本語 5 b	6	日本語 5 c	12				
日本語 4 a	9	日本語 4 b	6	日本語 4 c 〈Online〉	3				
日本語 3 a	16	日本語 3 b 〈Online〉	7	日本語 3 c	6				
日本語 2 a	9	日本語 2 b	12	日本語 2 c 〈Online〉	5				
日本語 1 + 〈Online〉	6								
日本語 1 a 〈Online〉	5	日本語 1 b	19	日本語 1 c	14	日本語 1 d	15	日本語 1 e	13

表7と表8は、JTCsに申請者の所属を部局と身分（修士・博士・研究生・交換留学生、その他）別に集計したものである。

表7 2023年度前期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	交換留学生	その他	部局別計
生物資源環境科学府	4	12	1	2		19
経済学部・経済学府	4	2	2			8
統合新領域学府	1	3				4
地球社会統合科学府	4	4	2	2		12
人間環境学府	11	4	7	1		23
システム情報科学府	6	6	6	2		20
システム生命科学府		2	2	1		5
法学部・法学府	15		2	2		19
文学部・人文科学府	2		3	6		11
数理学府	1					1
歯学部・歯学府		8	3			11
医学部・医学系学府		8				8
薬学部・薬学府			1			1
理学部・理学府	3	4	3	2		12
工学部・工学府	4	15	11	16	1	47
農学部			2	2		4
共創学部				7		7
留学生センター					1	1
課程別計	55	68	45	43	2	213

国籍（上位5ヶ国）：中国82, インドネシア13, エジプト9, フランス7, ベトナム6

表8 2023年度後期の所属・身分別の申請者数内訳

	修士	博士	研究生	交換留学生	その他	部局別集計
生物資源環境科学府	19	13	1	1		34
経済学部・経済学府	4	1	3	3		11
統合新領域学府	1	1				2
地球社会統合科学府	2	5	3	1		11
人間環境学府	7	5	18	3	1	34
システム情報科学府	4	5	4	2		15
システム生命科学府		4	3	1		8
法学部・法学府	24	2	8			34
文学部・人文科学府	2		1	2		5
歯学部・歯学府		9	2			11
数理学府	2	1		1		4
医学部・医学系学府		3	1			4
理学部・理学府	3	1	1	2		7
工学部・工学府	5	15	10	24	1	55
農学部			6	2		8
共創学部				8		8
課程別計	73	65	61	50	2	251

国籍（上位5ヶ国）：中国70, ドイツ13, インドネシア・フランス12, エジプト10

4. 2023年度に行った改善

4. 1. FAQ の作成、問い合わせ対応の負担軽減

登録申請期間から授業開始後2週間程度までの間、JTCs デスクには毎学期多くの受講生からの問い合わせメールが届く。2022年度には、記録されたものだけでも、前後期合わせて合計188件の問い合わせがあった。これらの問い合わせの大半は、受講登録の忘れやシステムへのログイン、レベルやクラスの変更、クラス選択の忘れ、教科書に関するものであった。2022年度までの対応は、教務補佐が一件ずつ返信する形で行われており、他の業務と並行していたこともあり、負担となっていた。そこで2023年度には、前年度の問い合わせを分類し、Google スプレッドシートを用いて英語の FAQ を作成した。そして、コースガイドにこのリンクを掲載し、申請者にはまず FAQ を確認するよう求めることにした。また、新たな問い合わせがあれば、内容と回答をスプレッドシートに随時反映させた。この FAQ の運用により、2023年度の年間問い合わせ数は88件に減少し、運営の負担を大幅に軽減することができた。

4. 2. 仮名文字トレーニングコースの開講

今年度、JTCs では新たな試みとして、主にゼロ初級者を対象としたひらがなとカタカナの補講クラスを授業開始前の2週間にわたって開講した。昨年度まで、仮名文字の指導は日本語1の授業で使用する教科書『げんき』を用いた文法や表現の授業と同時に行っていたが、今年度からはこれを独立させた形で実施することになった。この変更により、ゼロ初級の学習者は日本語1の授業開始前に仮名文字を習得し、『げんき』を使った学習に集中できるようになった。

このコースへの参加は必須ではなく、JTCs の受講要件にも含まれていない。ただし、仮名文字を学んでいない学習者は、日本語1が始まるまでに自習によりこれらを習得するよう指示された。

また、表9には、前期と後期に実施された仮名文字トレーニングコースのスケジュールを示している。両学期ともコーディネーターが指導を担当し、前期はハイブリット形式とオンラインの2コースを開講し、約30名の受講生が参加した。一方後期はオンラインの1コースを開講し、約40名の受講生が参加した。

なお、今年度このコースに多くのゼロ初級者が参加したことを受け、来年度も引き続き同じコースを開講することが決まっている。加えて、これを担当するコーディネーターの添削負担を軽減させるため、学生アルバイトの雇用を検討している。

表9 2023年度 JTCs 仮名文字補講コーススケジュール

	前期		後期
	ハイブリットコース	オンラインコース	オンラインコース
ひらがな1	4月20日（木）5限	4月29日（土）19：30－21：00	10月23日（月）19：30－21：00
ひらがな2	4月21日（金）5限	4月30日（日）19：30－21：00	10月25日（水）19：30－21：00
ひらがな3	4月25日（火）5限	5月1日（月）19：30－21：00	10月27日（金）19：30－21：00
カタカナ1	4月27日（木）5限	5月2日（火）19：30－21：00	10月30日（月）19：30－21：00
カタカナ2	4月28日（金）5限	5月8日（月）19：30－21：00	11月3日（水）19：30－21：00
カタカナ3	5月2日（火）5限	－	－

4. 3. 入門レベル日本語 1⁺の試行

今年度の後期には、入門レベルに日本語 1⁺（いちプラス／ワンプラス）というクラスが試験的に設けられた。これは、過去に日本語 1 の受講を様々な事情で途中で辞退した受講生が学習を再開しやすくなるよう整備されたものである。昨年度まで、こうした受講生が JTCs での学習を再開する際には、多くの場合、日本語 1 を再度受講していた。しかし、挨拶や自己紹介、数字などの基本項目を再び学ぶことは、学習意欲の維持を困難にすることがあったため、担当教員らから懸念の声が上がっていた。そこで、今年度の後期には日本語 1⁺ クラスを試験的に設け、日本語 1 の中盤からの学習内容を通常よりもゆったりとした速度で進めることができるようにし、受講生がモチベーションを保ちながらこのレベルの学習を終えられるよう配慮された。

4. 4. JTCs ロードマップの作成

今年度の前期に行われた別の試みとして、ヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）に対応した JTCs の日本語クラスのロードマップを作成し、コースガイドに掲載したことが挙げられる（図 1 参照）。このロードマップを通じて、受講生は JTCs の全体像と自身の日本語レベルの位置づけを視覚的に把握することができるようになった。さらに、在学中の日本語の学習計画も立てやすくなった。

5. おわりに

今年度、JTCs ではいくつかの新しい試みを実施し、コースの充実を図ることができた。これらの新しいことへの挑戦が可能となったのは、前任のコーディネーターと、留学生センターおよび国際部国際企画課の関係教職員の理解と協力のおかげである。この場を借りて、この方々に心からの感謝の意を表したい。

来年度、JTCs では全レベルでオンライン対応が可能なクラスを開講する予定である。これにより、本コースはキャンパスを超えた受講がこれまで以上に進展すると予想される。今後、オンライン化を発展的に推進すること（斉藤2023）を念頭に、関係者と引き続き連携し、工夫しながら、受講生のセーフティネットとしての役割をさらに強化していきたい。

参考文献

斉藤信浩（2023）「補講コース日本語（JTCs）」『九州大学留学生センター紀要』第31号、pp. 103-110.

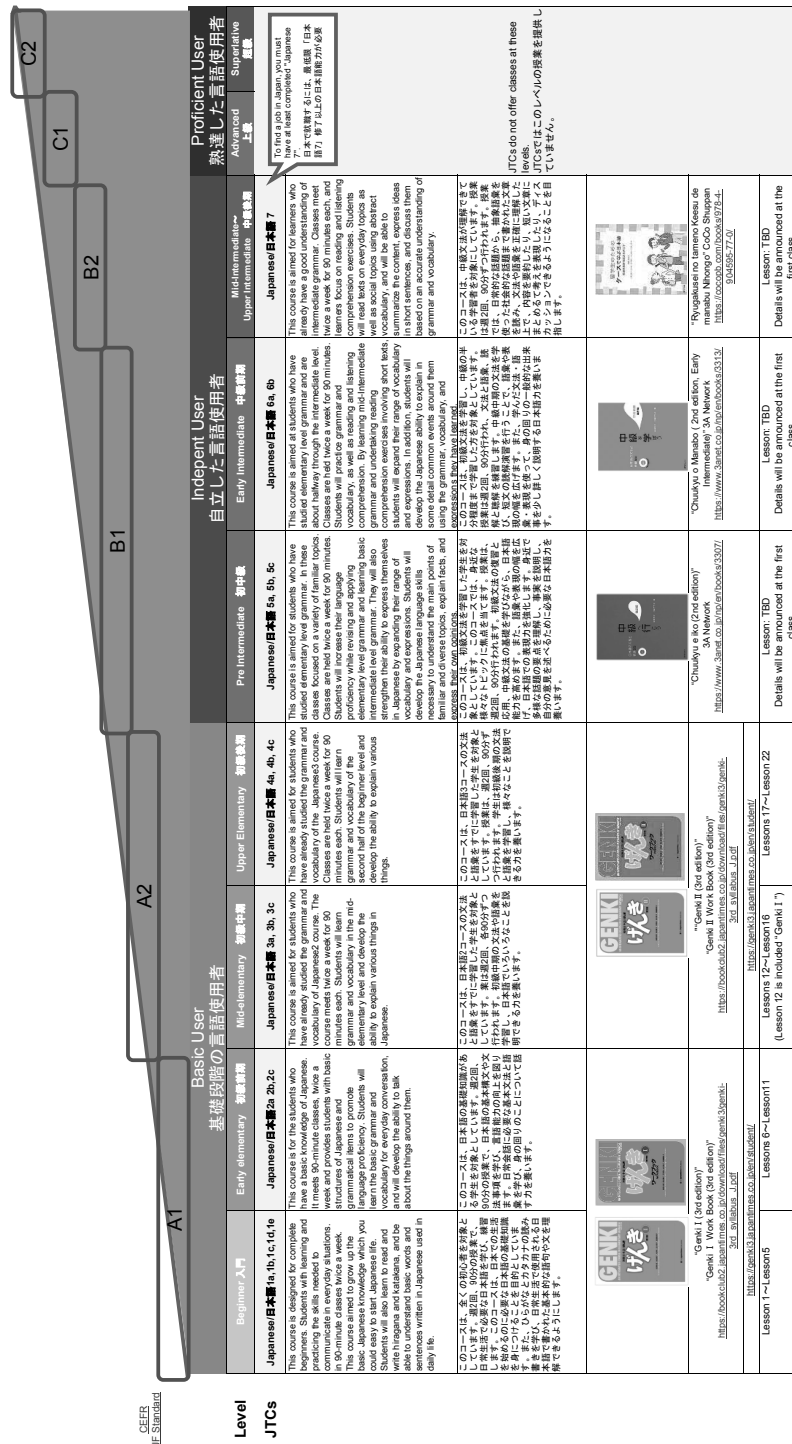


図1 2023年度前期 JTCs ロードマップ

筑紫・大橋地区日本語コース

— 2023年度 —

Japanese Language Courses at *Chikushi/Ohashi* campus (2023)

小 山 悟*

概要

2023年度前期は4月17日（月）から6月30日（金）までの10週間、後期も同じく10月10日（火）から12月25日（月）までの10週間開講した。

〈筑紫地区〉

筑紫地区では2021年度前期に1クラス増設され、現在は表1のような編成でコースを運営している。このうち、初級1から初級3までの3クラスは週2回の「総合コース」として教科書準拠で授業を行い、中級と上級は週1回の「技能別コース」として曜日によって授業内容を変え、成績も別々に出している¹。

表1 筑紫地区のコース編成

コース名	クラス数
初級1	1（週2回）
初級2	1（週2回）
初級3	1（週2回）
中級	2（週1回）
上級	2（週1回）

2023年度の時間割は表2・3に示したとおりである。なお、木曜日5時間目の「大学院」とは、総合理工学府が独自に開講している日本語正規科目（週1回×15週）のことである。例年前期に修士対象の「Communication Skills in Japanese (CSJ)」を、後期に博士対象の「Fundermentals of Japanese Communication (FJC)」を開講しており、授業は筆者が担当している²。2023年度は前期の受講者がゼロだったため、後期のみ開講した。

*九州大学留学生センター准教授

1 よって、どちらか一方のクラスだけを受講することも「可」としている。

2 予算の出処は異なるが、筑紫地区における日本語学習のニーズを示すデータとして、毎年、留学生センター主催の授業と合わせて報告している。

表2 筑紫地区（前期）の時間割

	月	火	水	木	金
1 時間目					
2 時間目					
3 時間目					
4 時間目		初級 2 中級			
5 時間目	中級	初級 1 初級 3 上級 【会話】	上級 【読解】	初級 2 初級 3	初級 1

表3 筑紫地区（後期）の時間割

	月	火	水	木	金
1 時間目					
2 時間目					
3 時間目					
4 時間目		初級 1 初級 2 初級 3 中級 【会話】 上級 【会話】			
5 時間目	中級 【文法】		初級 2 上級 【読解】	初級 3 大学院	初級 1

〈大橋地区〉

大橋地区では現在、筑紫地区より1つ少ない4レベル編成でコースを運営している（表4）。学生たちのニーズに細やかに対応するために、全てのクラスを週1回の「技能別コース」とし、成績も別々に出している。ただし、2023年度後期については、前期に初級1を終えたばかりの学生たち（初級2相当：主に非漢字圏出身の学生）と中級クラス

表4 大橋地区のコース編成

コース名	クラス数
初級 1	2（週1回）
初級 2	2（週1回）
初級 3	
中級	2（週1回）
上級	2（週1回）

に入るにはやや力が及ばなかった学生たち（初級3相当：主に漢字圏出身の学生）がそれぞれ一定数いたため、「初級2・3」（合同クラス）として開講した³。2023年度の時間割は表5・6に示したとおりである。

表5 大橋地区（前期）の時間割

	月	火	水	木	金
1 時間目					
2 時間目					
3 時間目					
4 時間目		初級 2 【文法】		初級 2 【会話】 上級 【会話】	
5 時間目	上級 【作文】	初級 1 【会話】 中級 【会話】		初級 1 【文法】	中級 【作文・文法】

表6 大橋地区（後期）の時間割

	月	火	水	木	金
1 時間目					
2 時間目					
3 時間目					
4 時間目		初級 2・3 【文法】	初級 2・3 【会話】	上級 【会話】	
5 時間目	上級 【作文】	初級 1 【会話】	初級 1 【文法】 中級 【作文・文法】	中級 【会話】	

受講者数など

プレースメントテストの申込者数は、前期は78名で、内訳は筑紫が32名、大橋が46名であった。また、後期は95名で、内訳は筑紫が41名、大橋54名であった。その後、辞退する学生や遅れて申し込みをする学生がいたため、最終的な登録者は前期75名（筑紫31名、大橋44名）、後期90名（筑紫42名、大橋48名）となった。ただし、筑紫地区後期の初級1にはCSJ/FJCの受講者（13名）が含まれている⁴。

3 授業では同じトピックについて2種類のハンドアウトを用意した。

4 理由は注2で述べたとおりである。

表7 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）

年度	13前	14前		15前		16前		17前		18前		19前		20前		21前		22前		23前	
担当	鹿島	小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山	
地区	合同	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	筑	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大
初級 1	データなし	12	8	25	5	19	7	26	14	26	13	23	12	5		17	3	21	7	12	12
初級 2		6		11	8	14	12	25	8	16	7	11	7	8	3	13	6	11	6	5	10
初級 3														12		10		10		6	
中級		14		10		11	21	14	22	17	6	10	9	13	6	6	9	3	19	5	13
上級				8		12	19	15	16	18	19	10	14	14	7	8	6	11	12	3	9
合計		32	8	54	13	56	59	80	60	77	45	54	42	52	16	54	24	56	44	31	44

注. 筑紫地区の太字（初級1の受講者）は大学院クラスの受講者数も含む（2023年度前期はゼロ）

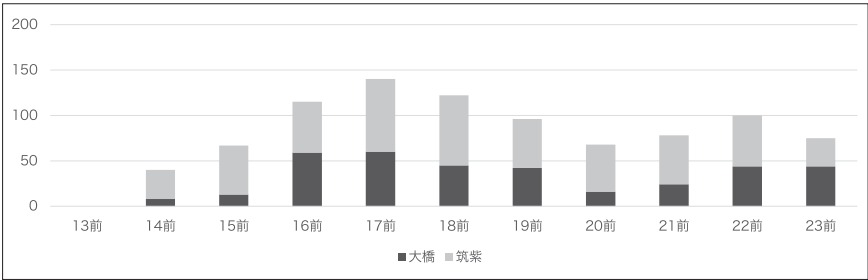


図1 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（前期）

表8 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

年度	13後	14後	15後		16後		17後		18後		19後		20後		21後		22後		23後		
担当	鹿島	小山	小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山		小山		
地区	合同	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大	筑	大
初級1	10	22	15	28	8	50	14	27	14	34	15	30	12	53	8	21	8	41	10	24	13
初級2	7	10		6	6	12	5	21	11	22	10	15	4	20	7	9	16	5	16	3	13
初級3																8		6		5	
中級	2	14		5	14	12	25	14	29	24	22	18	25	16	14	12	8	4	15	5	13
上級				8	20	5	19	8	21	19	39	18	22	11	14	17	12	12	19	5	9
合計	19	46	15	47	48	79	63	70	75	99	86	81	63	100	43	67	44	68	60	42	48

注. 筑紫地区の太字（初級1の受講者）は大学院クラスの受講者数も含む（2023年度後期は13名）

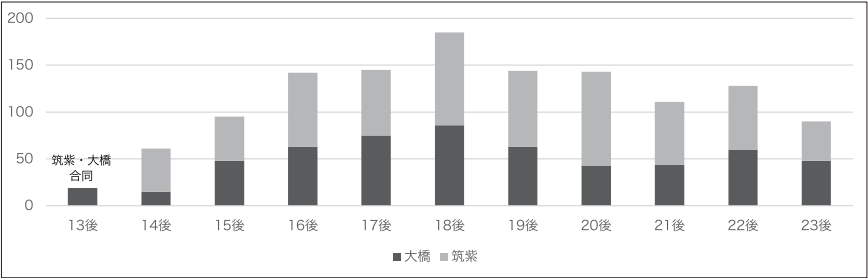


図2 筑紫・大橋地区の日本語クラス受講者数の推移（後期）

日本語・日本文化研修コースの報告 (第23期生)

Report on Japanese Language and Culture Course (JLCC 2022-2023)

郭 俊 海*

1. はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コース Japanese Language and Culture Course、以下「JLCC」という）は、日本国以外の大学の学部もしくは大学院に在籍し、日本語・日本文化に関する分野を専攻している学生を11か月間受け入れ、今後の日本研究に必要となる日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深めることにより、諸外国の将来を担う世代に日本への興味・関心を伝播し、日本の事情に通じた指導者となる人材を育成することを目的とした短期留学コースである。

2. 概要

2. 1. 受け入れ人数

平成12年度から、日本語・日本文化研修生（以下、「JLCC 生」という）は一括して留学生センターが受け入れ主体となっており、令和5年度の受け入れ人数は12名である。

2. 2. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の8月31日まで

2. 3. 出身国・地域と出身大学

23期生は、7カ国・地域の8大学から計12名が参加している。うち、国費奨学金受給者は2名である。表1はその出身国・地域と出身大学を示す。

*九州大学留学生センター教授

表 1 23期生の出身国・地域

国・地域	大学名	人数（名）
韓国	釜山外国語大学	1
香港	香港中文大学	1
台湾	国立台湾大学	1
中国	吉林大学	1
	山東大学	2
	南開大学	2
イタリア	ミュンヘン大学	1
ドイツ	ミュンヘン大学	1
フランス	国立東洋言語文化大学	2
(計7カ国・地域)	8大学	12

2. 4. 主な年間行事

日にち

行事内容

2022年

9月19日（月）～30日（金）	JACs オンライン受講申し込み及びプレースメントテスト
9月27日（火）	オリエンテーション
10月3日（月）	令和4年度秋季入学式・外国人短期留学プログラム開講式
10月4日（火）	基幹教育・学部・JLCCの授業開始
10月8日（土）	福岡市防災センター見学
11月6日（日）	東風コミュニティーセンター交流会
12月19日（月）	太宰府戒壇院座禅体験

2023年

1月6日（金）	JLCC、JACs、基幹教育及び学部の授業開始
1月30日（月）	春学期オリエンテーション
4月7日（金）	日田見学旅行
5月15日（月）	吉野ヶ里遺跡見学
5月22日（月）	三者面談
6月19日（月）	祐徳稲荷神社見学
8月9日（水）	閉講式
8月25日（金）	成果発表会

2. 5. コースの修了要件

JLCCのカリキュラムは、必修科目、選択必修科目と選択科目から構成される。コースを修了する

には、年間30単位（450時間）の履修が必要である（表2）。

• **必修科目（2単位、30時間）**

留学生センターで春学期に開講される「自主研究（ISP：Independent Study Project）」で、2単位を履修する。

• **選択必修科目（24単位、360時間）**

留学生センターで開講される選択必修科目群の「日本語論（JL: Japanese Language and Linguistics）」、「日本社会文化論（JC: Japanese Culture and Society）」のうち、それぞれ年間12単位以上を履修する。

• **選択科目（4単位、60時間）**

基幹教育院や文学部、経済学部、法学部など各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業科目を年間2科目（4単位）以上履修する。

表2 JLCC23期生のカリキュラム

	秋学期（10月～3月）	曜日 & 担当者	春学期（4月～8月）	曜日 & 担当者
必修科目			自主研究 2単位（30時間） ISP（Independent Study Project）	火2水5郭
選択必修科目	日本語論（Japanese Language and Linguistics） 通年12単位（180時間）			
	JL 101 日本語学概論	金3 斉藤	JL 203 日本語・日本文化概論 B	金2 郭
	JL 102 日本の文学	木3 斉藤	JL 205 ジグソー法で学ぶ身近な日本学	水3 小山
	JL 103 日本語・日本文化概論	金2 郭		
	JL 104 ドキュメンタリー番組で学ぶ日本語	木2 柴田		
	JL 106 日本社会と地域方言	火5 楠木		
	日本社会文化論（Japanese Culture and Society） 通年12単位（180時間）			
	JC 102 和菓子と日本人 A	火2 脇坂	JC 202 和菓子と日本人 B	木3 脇坂
	JC 104 ドラマで学ぶ日本の歴史	水3 小山	JC 203 民族音楽にみる日本	木2 柴田
	JC 105 4コマ漫画にみる日本 A	火3 和田	JC 204 九州学	金3 楠木
選択科目	JC 106 日本映像文化論 A	火1 大神	JC 205 4コマ漫画にみる日本 B	火3 和田
	JC 206 日本映像文化論 B			木5 大神
選択科目	通年4単位（60時間） 各学部等が開講する日本の社会や文化に関する学部学生向け授業			

2. 6. 単位認定

本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることでもある。

3. 授業について

3. 1. 授業の取り方

授業の取りかたについては、従来通り、秋学期に留学生センターが開講する各種の技能別日本語

コース（総合、会話、漢字、作文）と JLCC の必修科目を中心に受講させ、日本語力を高めることを目的とした。春学期には、引き続き JLCC の必修科目、基幹教育院や学部授業を中心に受講させた。

3. 2. 必修科目「自主研究」

JLCC 生の日本語の応用力を高めることと、身を持って日本人や日本社会に接する機会を与えることを目的とし、従来の「文献講読」を15期生から「自主研究（ISP: Independent Study Project）」としている。

「自主研究」は「文献講読」と「社会調査」に分けた。社会調査では、各自が興味のある日本に関する分野からテーマを見つけ、それについて問題設定や社会調査（インタビュー調査・質問紙調査）を行う。隔週に口頭発表による進捗状況の報告をし、学期末にレポートを作成する。文献講読も同様に、各自が興味のある分野から単行本一冊を選び精読し、隔週に口頭発表による進捗状況の報告をし、学期末にレポートを作成する。

新型コロナウイルス感染症が収束したため、前年度まで中止していた「社会調査」を再開した。「社会調査」を選んだ研修生は多かった。

以下は、研修生たちのレポートのテーマである。

- | | |
|-------------------|----------------------------|
| 1. ヴィグル・グエナエル | 「戦争孤児」を生きる |
| 2. キム・ヒョンジョン | 日韓交流における朝鮮通信使再現行事の意義 |
| 3. キン・シュツキョ | 日本ひいては全世界の幻想作品における文学的な核を探す |
| 4. グリンフェルダ・アンナ | 鴻上尚史の『「空気」と「世間」』 |
| 5. チョー・シキ | 菊と刀—日本語訳本と英語原文の研究 |
| 6. チョウ・ケイホウ | 円安が日本を滅ぼす—米韓台に学ぶ日本再生の道 |
| 7. ホウ・カミチク | 女ざらい—ニッポンのミソジニー |
| 8. プチ・カーラ | 八重山離島の葬儀 |
| 9. マーガ・マルセル・ジュリエン | 学業性能とスポーツの関係 |
| 10. リュウ・カンリ | 教育格差—階層・地域・学歴— |
| 11. ヨウ・ナン | AI 支配で人は死ぬ |
| 12. ヨウ・ロカ | 女嫌い |

3. 3. エクストラ・カリキュラムの開発

近年、JLCC 生の関心や興味は、日本語よりも日本文化や日本社会一般に移りつつある傾向である。修了生からは「日本文化を体験できる機会を増やしてほしい」「見学旅行や日本人との交流活動をもっと多く行ってほしい」、「帰国前に日本でインターンシップを経験したい」等の声が上がってきている。こういった修了生のフィードバックを踏まえ、体で日本文化を体験できる活動を増やすことを目的とし、ゲストレクチャーや課外活動を含むエクストラ・カリキュラムの開発・実施を継続している。また、新型コロナウイルス感染症収束のため、課外活動（前掲「行事内容」）を再開した。

3. 4. その他

学生の指導においては、これまでは、普段勉強や生活に関する相談に対し適宜手当を講じるほかに、学期ごとに、それぞれ2回にわたって JLCC 生全員を対象に一人ずつ三者面談（コーディネーターと事務担当）を実施してきた。また、毎週、授業の前後の時間を利用して面談を行い、勉強上の問題点などを迅速に把握し、スムーズな問題解決につながった。

4. コース評価

コース評価は、これまでは春学期の「自主研究」の最後の授業時に、JLCC 生によるプログラム評価の報告会を行い、カリキュラムの構成、授業内容、見学旅行及び今後の改善点の五つの面から、「非常に満足」「満足」「どちらとも言えない」「あまり満足しない」「満足しない」と5段階評価で、Google Form を使用して回答してもらった。

1. プログラム全体について（回答者：9人）

カリキュラムの構成、授業内容などプログラム全体について、「非常に満足」「満足」と回答した人が9人（100%）だった。「素晴らしいプログラムだと思います。引き続けてください」「日本語力に、一人暮らしに、チャレンジ精神に、様々方面で自分の成長を感じました。」「発表は辛かったが、日本語を話させられて非常に鍛えることができました」とあるように、カリキュラムの構成や授業内容に満足していることが示されている。

2. 「自主研究」（回答者：9人）

自主研究の難易度については、「ちょうどよい」が45%、「難しかった」が56%と、やや難しく感じられた。全体的に「良かった点」としては、「難しかったが、進め方は創新的だった」「論文の書き方が学べた」「個人指導が大きく役に立ちました」との声があった。一方、問題点として「調査方法に関する情報や例がもっとほしい」とあるように、今後一層具体的な例を提示しつつ、さらに細かい指導が必要である。

5. 今後の課題

近年、研修コース生から「日本人学生と一緒に受ける授業が少ない」といった声や、日本企業への就職、日本や海外の大学院への進学に関する相談が増えてきている。今後、日本人学生と研修コース生との協働学習型のカリキュラムの開発や、研修コース生を対象とした、就職、大学院進学に関する支援やフォローアップをいかに提供すべきかが、引き続き課題となる。

また、カリキュラム改善の一環として、「日本文化をもっと体験したい」という研修生のニーズに応え、実体験できる授業科目やコンテンツベースの内容を増やしてきた。今後も、学生のニーズを踏まえ、引き続き学内外のリソースを活用し、カリキュラムの改善・充実を図っていく。

農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育

— 2023年度の実施状況 —

2023 Overview of the Japanese Language Education for those in the Undergraduate International Program in English (IUPE) at the Faculties of Engineering and Agriculture

柴 田 あづさ*

1. はじめに

本年度、農学部および工学部の学士課程国際コース（以下、IUPE¹）に入学した留学生（以下、IUPE 生）が留学生センター提供の Japanese Academic Courses（以下、JACs）を受講する体制に移行して6年目を迎えた。IUPE 生は、I（総合日本語）コース、K（漢字）コース、S（会話）コース、W（作文）の4コース／8レベル編成のJACsの中からIコースとKコースを受講し、それを基幹教育・言語文化科目「日本語」に換算して単位を修得している。以下では、2023年度の1年生の受け入れと2年生に進級したIUPE 生のJACs受講に関する概況を報告する。

2. JACs 受講までのスケジュール

新型コロナウイルス感染症が5類に分類変更されたことを受け、今年度のJACsの授業は基幹教育の方針に基づき基本的に対面方式で行われた。表1および表2は、10月に入学した新1年生と、10月に進級した新2年生のJACsを受講するまでのスケジュールを示している。

表1 2023年度新1年生のIUPE 生のJACs 受講までのスケジュール

9月19日～9月29日 13:00	JACs システムへの受講登録、OT 受験
9月28日 10:30	基幹教育ガイダンスでのJACs 受講オリエンテーション
10月2日	受講クラスの結果発表
10月5日	JACs 受講開始

*九州大学留学生センター准教授

1 International Undergraduate Program in English の略。

表2 2023年度新2年生以上のIUPE生のJACs受講までのスケジュール

9月19日～9月29日 13:00	JACs システムへの受講登録、OT ² 受験 (I コースのレベル変更希望者のみ)
10月2日	受講クラスの結果発表
10月5日	JACs 受講開始

2023年度の新1年生は、農学部13名、工学部16名で、JACs 履修の案内メールは昨年と同様に基幹教育教務係から代理送信された。IUPE 新1年生のJACs 受講オリエンテーションは、昨年度と同様に共創学部新1年生と合同で対面により開催され、筆者が窓口担当教員として英語で説明を行った。

一方で、新2年生以上でJACsを受講した者は、農学部3名、工学部14名であった。受講登録の案内メールは、新1年生と同様、基幹教育教務係に送信を依頼し、期間中にクォーター3とクォーター4の登録をするよう促した。

3. 受講レベル（コース）調整の結果

1年生はOTの結果により判定されたレベルに、また、2年生はレベルアップする者を除いてクォーター1およびクォーター2に受講したJACsの成績評定に基づき決定されたレベルの授業に出席した。そして、適当な難易度でないと教員が判断した場合は適切なレベルに移動し、クォーター3開始後2週間ほどで各留学生の最適な受講レベルが確定した。

4. 日本語免除科目のR認定状況

JACsや基幹教育、農・工学部の卒業要件における取り決めでは、IUPEに在籍する正規留学生は通常、1年次にIコース4単位、Kコース4単位をそれぞれ取得し、2年次の前半にはIコースをさらに2単位取得することが求められている。しかし、IUPEには日本語を母語とする学生や、日本語と他言語を第一言語とする学生もいる。そのため、JACsのプレースメントテストで日本語がネイティブレベルと判定された場合、2022年度からは日本語科目を全てまたは一部履修したとみなされ、成績は「R」として認定されることになった。2023年度には、農学部の新1年生3名が日本語科目の全部または一部についてR認定を受けた。

5. IUPE生のJACs受講に関わる今後の課題

工学部の『IUPE 履修要綱』における履修細目には「日本語の『Integrated Courses (1)』、『Kanji Course (1)』から各4科目4単位以上、合計で10単位以上を修得すべきである」との記載があるが、これが近年JACsの運営上の課題となっている³。この記載からは、2年生全員がIコースとKコース

2 インターネット上の日本語のレベル判定テストで、文法、読解、聴解の3種類がある。

を履修すること、またはIコースに代わってKコースを選択できると解釈されることがある。実際に、IUPE生の中には1年生だけでなく2年生でもIとKコースの両方を履修希望する学生や、母語や育った言語環境に関わらずKコースを選ぶ2年生も存在する。このような学生の要望に応じると、JACsのIとKコースで定員超過の問題が生じる可能性がある。この点については、工学部及び基幹教育の担当者から「原則として、Iコース6単位、漢字コース4単位を取得すべきである」との指導が行われており、個々の学生に対しても適切に対応が行われている。しかし、よりスムーズな履修手続きを実現するためには、「履修要綱」に学生が理解しやすい形で履修方法の詳細を記載することが肝要である。このため、今後も工学部、基幹教育、留学生センターの各担当者間で協議を進め、この問題の解決策を探りたい。

参考文献

- Kikan Education (2023) "Information Guidebook for International Undergraduate Program in English and School of Interdisciplinary Science and Innovation (October Enrollment) 学士課程国際コース／共創学部（10月入学生）履修要項：For Students Enrolled in Autumn 2023 2023年度10月入学者用" Kikan Education, Kyushu University, 37-56.
- 柴田あづさ（2022）「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 ― 2021年度の実施状況 ―」『九州大学留学生センター紀要』30, 67-70.
- 柴田あづさ（2023）「農学部・工学部の学士課程国際コース生に対する日本語教育 ― 2021年度の実施状況 ―」『九州大学留学生センター紀要』31, 111-114.

3 英文（正）では次のように示されている。"Students also have to acquire at least 4 credits each from "Integrated Courses" and "Kanji Courses", for total of at least 10 credits."

2022年度 “AsTW2023” 実施報告

“ASEAN in Today’s World (ASTW)”

生 田 博 子*

1. ASEAN in Today’s World とは

ASEAN in Today’s World (AsTW) は、近年の世界政治経済への影響力を増している ASEAN 地域にフォーカスし、世界で活躍する次世代のアジアブリッジの核となる人材の育成を目的として本学が開発した教育プログラムである。平成20 (2008) 年度から ASEAN 諸国の有力大学を共同実施校（ホスト校）として、毎年2月下旬から3月上旬に ASEAN 地域で実施している。毎年、日本人学生及び ASEAN 諸国からの留学生合計40名程度が参加しており、2週間のプログラム実施期間、生活を共にすることにより、活発な国際交流や異文化への相互理解を深める。

なお、新型コロナウイルス感染拡大により2020年度と2021年度はオンライン開催だったが、2023年3月に実施された2022年度 “AsTW2023” は、3年ぶりに現地開催となった。

2. 共同実施大学（ホスト大学）及び協力大学

共同実施大学：

- ・マヒドン大学：第13回（2020年度）～第16回（2023年度）

協力大学：

- ・マヒドン大学（第1回～第3回、第13回～第15回の共同実施校）
- ・アテネオ・デ・マニラ大学（第4回～第6回の共同実施校）
- ・ベトナム国家大学ハノイ校（第7回～第9回の共同実施校）
- ・マラヤ大学（第10回～第12回の共同実施校）
- ・福岡女子大学（学生・講師派遣について協力。マヒドン大学と独自の短期留学プログラムがあるため、2020年度から参加せず）

*九州大学留学生センター准教授

3. プログラム スケジュール (2022年度)

実施期間 2023年3月13日(月)～3月24日(金)

- 3月13日(月): オリエンテーション・ASEAN 事務局特別講演・開講式
- 3月14日(火)～3月17日(金): 授業
- 3月18日(土): スタディ・トリップ
- 3月19日(日): 休日
- 3月20日(月)～3月24日(金) 午前: 授業
- 3月24日(金) 午後: 閉講式

4. 開講科目及び修了要件 (2022年度)

(1) ASEAN 研究コース (ASC: ASEAN Studies Courses): 2 科目

- Social Innovator Incubation (マヒドン大学講師)
- Multiculturalism in Asia (留学生センター生田准教授、木下准教授)

(2) アジア言語・文化コース (ALC: Asian Languages & Cultures Courses): 2 科目

- Thai Language & Culture Course (マヒドン大学講師)
- Japanese Language & Culture Course (マヒドン大学講師)

参加生は、(1) ASC から1科目、(2) ALC から1科目の計2科目を選択して履修し、合計4単位の認定を受けることを修了要件としている。また、バーチャルスタディートリップや文化体験、及び ASEAN 事務局による特別講演等、参加生はすべての講義・活動に参加することが求められた。

5. 参加者 (2022年度)

	人数	大学
日本	9	九州大学: 共創 (6)、医 (1)、教育 (1)、経済 (1)
タイ	6	Mahidol Univeristy (6)
ベトナム	9	Vietnam National University, Hanoi (3)、Vietnam National University - University of Social Sciences and Humanities (1)、University of Economics Ho Chi Minh City (1)、Diplomatic Academy of Vietnam (2)、Foreign Trade University (2)
マレーシア	2	Universiti Malaya (2)
フィリピン	5	Ateneo De Manila University (3)、Central Luzon State University (2)
合計	31	

※マヒドン大学生5名は学費免除。また、残りのマヒドン大学生1名と他の ASEAN 諸国大学生16名は本学より奨学金支給。

6. 奨学金（2022年度）

九州大学から参加者への経済的支援として、全学協力事業基金から ASEAN 加盟国の学生17名にプログラム参加費を支給した。また、九州大学の学生7名に JASSO の奨学金を支給した。条件を満たす者には、渡航支援金も支給した。

Kyushu University Japan In Today's World (JTW)

A Brief Review of the 29th Class (Oct. 2022 – Jul. 2023)

Masa Higo *

Ryoichi Imai **

Chisato Nonaka ***

1. The JTW Program – An Overview

Kyushu University Japan In Today's World (JTW, hereafter) is a year-long, English-taught study program for international students that the University's International Student Center runs annually as part of the University's institution-wide effort to facilitate international student exchange. The primary purposes of the program are two-fold: educational and strategic. First, designed to help the program participants begin to understand or deepen their knowledge of contemporary Japanese society and culture, JTW aims to nurture the next generations of leaders and experts in fields related to Japan. Second, as Kyushu University's flagship short-term study program for international students, JTW contributes to sustaining and even increasing students' inbound mobility to Kyushu University as an institutional means of facilitating the same for the outbound mobility of the University's Japanese students to its partner institutions around the world.

JTW provides participants with opportunities and resources for a range of both academic learning for credit and extracurricular activities for experiential learning. For academic learning, first the program offers a set of required elective courses called JTW core courses. The program also enables the participants to enroll in regular faculty courses, Japanese language courses, and semester-long individual study projects¹. On top of these in-class learning activities, JTW also arranges various extracurricular activities for the participants to participate in for the purpose of deepening their knowledge of Japanese society and culture through their own experiential learning. Such activities include – but are not limited to – field study trips, the home visit program, the student tutor program, the tandem learning program, as well as on-campus cross-cultural events including a Kimono Wearing Workshop and the Nagasaki Atomic Bombing Survivor Symposium.

*Professor, Kyushu University International Student Center

**Associate Professor, Kyushu University International Student Center

***Associate Professor, Kyushu University International Student Center

1 For humanities or social scientific studies, participants may enroll in Independent Study Projects (ISPs) for credit. For studies in or related to biology or engineering, Advanced Laboratory Research (ALR) is available.

The main program participants are international students who come to join Kyushu University as exchange students for a year or a semester. Their home institutions are Kyushu University's partner institutions, those that have made university-wide – as opposed to school-specific – memorandum of understanding agreements for student exchange with the University. Most program participants are undergraduate students at their home institutions because that is the level of study at which JTW is programmed, but every year a few graduate students also apply for and are accepted to the program. While designed as a 'year abroad' program, JTW also accepts 'semester abroad' participation in order to accommodate the academic calendars of some participants' home institutions. Roughly over the past decade, JTW annually hosts a crude average of 70 students from some 30 partner institutions around the world. Those institutions are located in an average of 15 different countries and regions of the world ranging from Africa and the Middle East to North America, Europe, and Asia.²

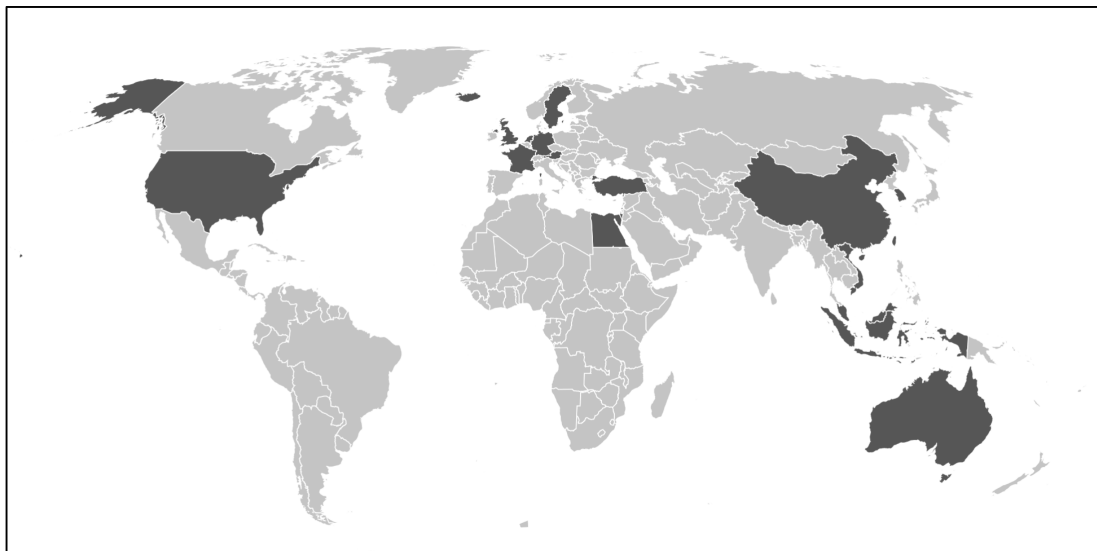
This report briefly reviews the 29th class of JTW, which started in October 2022 and was completed in July 2023. It should be noted that this class marks a milestone of the program's history as the last year of the third decade since the program was first launched in 1994. This report first reviews the outlook of the participants and their home institutions and then highlights the key outcome of the program's evaluation survey to summarize how the participants of the 29th class viewed their experience of the program.

2. The 29th Class of JTW – An Outlook of the Participants

Over the course of the 29th class of JTW, a total of 72 students participated. As in past years, this body of participants consisted of three different groups by length and timing of program participation: 32 students participated in the program for a program year, 12 only for the first semester (Oct. 2022–Feb. 2023), and 28 only for the second (Apr.–Jul. 2023). By semester, 44 students participated in the first semester, and 60 for the second. In total, participants came from 44 partner institutions, located in 19 different countries and regions around the world. As illustrated in **Graph 1** below, these countries and regions are spread across all the four major regions of the world as categorized by the United Nations: Americas, Asia Pacific, Europe, and Middle East/Africa. This trend has been maintained roughly over the past five years.

Table 1 below lists the partner institutions of all participants of the 29th class of JTW. It also indicates the numbers of participants from each institution by length of program participation: year, fall, and spring. In keeping with the trend of the past decade or so, the largest number of participants came from partner institutions in the UK, Germany, and France, in decreasing order. As **Table 1** also indicates, at the

2 The 26th and 27th classes (from program year 2019 through 2021) made an exception in this regard – the number of program participants significantly decreased during this period of time due to the impact of the COVID-19 pandemic. Only 31 and 14 students participated in those classes respectively.



Graph 1. Countries and regions where home institutions of the 29th class of JTW are located.

institutional level Technical University of Munich (Germany) sent the largest number of students to JTW—a total of six students, followed by Stockholm University (Sweden), which sent five. Arizona State University (US), University of Leeds (UK), and The University Bordeaux Montaigne (France) each sent three students. All these partner institutions have remained the most active in sending their students to JTW over the past five years.

Table 1. The 29th class of JTW – List of partner institutions that sent their students to JTW

Country / Region	Partner Institution	Year	Fall	Spring	Total
United States	The University of Rhode Island	0	1	0	1
	Arizona State University	0	0	3	3
	University of Georgia	0	0	1	1
	San Jose University	0	0	1	1
	Berea College	0	0	2	2
United Kingdom	The University of Sheffield	1	0	0	1
	University of Bristol	2	0	0	2
	University of Leeds	3	0	0	3
	SOAS, University of London	2	0	0	2
	Newcastle University	2	0	0	2
	Durham University	0	1	0	1
	University of Birmingham	2	0	0	2

France	The University Bordeaux Montaigne	3	0	0	3
	Bordeaux Institute of Technology	1	0	0	1
	Université Grenoble Alpes	2	0	0	2
	Aix-Marseille University	2	0	0	2
	University of Strasbourg	0	0	1	1
Germany	Heidelberg University	1	0	0	1
	RWTH Aachen University	1	0	1	2
	Technical University of Munich	0	3	3	6
	Ludwig Maximilian University of Munich	1	0	0	1
	University of Hildesheim	1	0	0	1
Sweden	Stockholm University	2	1	2	5
Austria	University of Vienna	0	1	0	1
Iceland	University of Iceland	1	0	0	1
Netherlands	Leiden University	0	1	0	1
Australia	The Australian National University	1	0	0	1
	The University of Queensland	0	1	0	1
Egypt	Ain Shams University	2	0	0	2
Israel	The Hebrew University of Jerusalem	0	0	2	2
	Tel Aviv University	0	0	2	2
Turkey	Bogazici University	1	0	0	1
Singapore	National University of Singapore	0	1	1	2
	Singapore Management University	0	0	1	1
Malaysia	University of Malaya	0	1	0	1
Indonesia	University of Indonesia	0	0	2	2
Vietnam	Vietnam National University, Ho Chi Minh City	0	0	1	1
Hong Kong (China)	Chinese University of Hong Kong	1	0	1	2
	The University of Hong Kong	0	0	1	1
	The Hong Kong University of Science & Technology	0	0	1	1
	The Hong Kong Polytechnic University	0	0	1	1
South Korea	Sungkyunkwan University	0	0	1	1
Taiwan	National Tsing Hua University	1	0	0	1
The 29 th Class Total:					72

At least the following two characteristics should be noted about the 29th class of JTW. First, the number of partner institutions that sent their students to JTW – 44 institutions – is the largest of the program's history.³ Second, due in part to the first characteristic, also larger than any past class is the number of partner institutions sending their students to JTW for the first time. The following seven

3 This number is substantially greater than that of the 24th class, 38 institutions, which had been the largest up until the 29th class.

institutions newly sent their students to the program: The University of Rhode Island (US), University of Hildesheim (Germany), University of Vienna (Austria), Tel Aviv University (Israel), Bogazici University (Turkey), Vietnam National University, Ho Chi Minh City (Vietnam), and Sungkyunkwan University (South Korea). Except for the last, all these institutions have just made university-wide partnership agreements with Kyushu University within the past two years. Each of these is a leading institution in their respective countries according to the main world ranking schemes such as the Times Higher Education. Together, these two characteristics may suggest a positive trend for JTW and Kyushu University at large – the program has become known and available, more widely than ever before, to university students around the world who are interested in experiencing studying abroad in Japan.

The 29th class of JTW formally concluded on July 26, 2023, when the official closing ceremony was conducted at Inamori Hall, Kyushu University Ito Campus. The ceremony attendees included the President and one of the Executive Vice Presidents of the University as well as all the program faculty coordinators, JTW Office staff members, some student tutors, host families for the home visit program, and the participants' families and friends. The class was successful in that none of the participants experienced any major illnesses, injuries, or safety-threatening accidents. No student withdrew from the program either. In academic activities, 70 out of 72 participants successfully completed at least the minimum number of courses required by the program and earned official credits accordingly.⁴ **Photo 1** is an official photo taken during the closing ceremony of the 29th class of JTW.



Photo 1. The 29th class of JTW at the closing ceremony (July 26, 2023)

4 JTW requires that a year-long participant enroll in and complete a minimum of 12 courses and a semester-long participant six courses.

3 . Participants' Feedback – A Summary of Program Evaluation

As part of the effort for continuous program improvement, every year JTW implements a program evaluation survey at the end of the program year, typically during the last week of July. All those program participants who participate in the second semester of the program year are requested to respond to an online survey developed and annually adjusted by the JTW faculty coordinators. The participants are asked to respond anonymously to a series of both multiple-choice and open-ended questions along with free spaces in which to express their thoughts and suggestions for the program. All the data gathered through the evaluation survey are shared, analyzed, and discussed by the coordinators and JTW Office staff members as a set of pivotal information to improve the program for future classes. A summary of the program evaluation survey is also reported to a series of formal committee meetings of and beyond the International Student Center.

For the 29th class of JTW, the program evaluation survey was first carried out right after the closing ceremony finished while the participants were still present at the venue. The program then continued to call for responding to the survey over the next few days to raise the number of respondents. Consequently, of 50 participants of the program's second semester, 39 participants responded by the first week of August 2023, bringing the response rate to 78%.

Overall, arguably, participants in the 29th class of JTW experienced the program in a positive way, suggesting that the aforementioned program's educational purpose – helping them to learn about contemporary Japan – was successfully achieved this time round. For instance, the evaluation survey asked the respondents to respond to the statement: 'Overall, the JTW program has helped me deepen my understanding of Japan in today's world.' Respondents were asked to select their answer out of the five-point Likert-scale options consisting of 'strongly agree,' 'agree,' 'neutral,' 'disagree,' and 'strongly disagree.' **Figure 1** illustrates the responses to this specific – yet the most essential – survey question on behalf of the program evaluation. About 67% of the respondents selected the 'strongly agree' option, and some 26% chose 'agree;' together, about 93% of the respondents – 36 out of 39 respondents – reported that they found JTW helpful, to some extent at least, for their learning about contemporary Japanese society and culture (**Figure 1**).

It should be noted that this finding is not new to JTW. At least over roughly the past decade, the vast majority of the program participants have continually

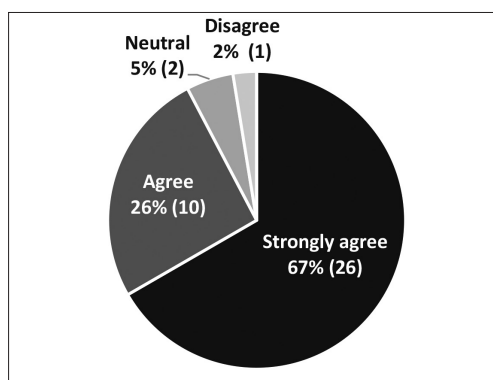


Figure 1. Program evaluation survey responses – 'Overall, the JTW program has helped me deepen my understanding of Japan in today's world.'

expressed positive views of the program in the program evaluation surveys; usually about 90% of the respondents have reported that they agree with the same or similar question statement.

This result, nonetheless, may be interpreted as an encouraging finding to the program particularly because of the aforementioned uniqueness of the participant demographics of the 29th class. As mentioned earlier, this class is characterized by the ever-diversified backgrounds of the participants' home institutions, which might have brought into the program different values, attitudes, and expectations of the program. Arguably, this finding may suggest that JTW's program design and the ways in which all the activities were carried out still remained effective in providing such a diverse body of participants with a meaningful and impactful learning experience. The program needs to continue improving its design, contents, and pedagogy as the backgrounds, interests, and level of academic preparation of the participants continue changing. Nonetheless, it may also be stated that as Kyushu University's flagship exchange program, JTW deserves celebrating a successful conclusion of its three decades of history with desirable outcomes and hopeful prospects for the future.

2022年度九州大学留学生センター留学生指導部門報告 (カウンセリング関係)

Report on International Student's Advising and Counseling Division (2022)

黄 正 国*

肥 後 裕 輝**

1. はじめに

九州大学留学生センター留学生指導部門は、外国人留学生および留学生に関わる教職員・学生、さらには地域の人々を対象として、様々な教育支援活動を行っている。本報告は、留学生指導部門の活動の中で、カウンセリングなどの相談支援に関連したものについてまとめた。

2022年度は、新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19と表記）の影響が続いているが、対面の授業が再開されるに伴って、キャンパス内で日本人学生と留学生が交流する機会が増えて、にぎやかな雰囲気が戻ってきた。留学生による新規の相談申込も増えた。前年度に続きオンラインと対面での相談を併用して留学生への相談支援を行った。

2. 相談活動

(1) 3段階の相談支援モデル

一次的相談支援は入学時のオリエンテーションや情報提供などである。留学課と共同主催している新入留学生オリエンテーションのほかに、4月と10月の新入生健康診断の会場に相談コーナーを設置して、留学生に必要な健康情報を提供した。またキャンパスライフ・健康支援センターのカウンセラーと協力して、各キャンパスで他大学から進学した大学院新入生を対象にオリエンテーションを実施した。入学直後に手続きや学内資源の利用方法に戸惑っている学生に、キャンパス内の資源を紹介したり関係窓口につなげたりして支援を行った。そのほかに、国際共修の授業として、学部生を対象に「日本事情」（前期）、大学院生を対象に「異文化理解の心理学」（後期）を開講し、留学生と日本人学生に異文化と触れ合う機会を提供した。

二次的相談支援は周囲の人々とコミュニケーションを取れない学生や、母国で障害または疾患を抱えていたハイリスクな学生に対して危機状況を未然に防ぐための介入である。キャンパスライフ・健

*九州大学留学生センター准教授

**九州大学留学生センター教授

康支援センターで実施されるアンケート問診で孤独、不安が高いと答えた学生や、母国で障害または疾病のために配慮を受けたことがある学生を対象に、学内外の医療機関と相談窓口の案内を送って、援助資源への橋渡しを行った。

三次的相談支援は危機状況にある留学生を対象に行う個別のカウンセリングである。キャンパスライフ・健康支援センターと協力して、「オンライン相談申込フォーム」（日本語・英語・中国語）を設け、伊都キャンパスだけではなく、病院キャンパス、筑紫キャンパス、大橋キャンパスでも予約制で相談を受けている。

担当者は臨床心理士・公認心理師であり、心理的な問題が専門であるが、留学生に関することであれば、日常生活、勉学、進路など様々な相談を受けた。また、緊急事態（急性の精神病、自殺や自殺未遂、事件・事故）には、対面相談を含めて他職種とともにチームを組んで対応する。

キャンパスライフ・健康支援センターには非常勤の留学生担当カウンセラー（英語担当2名、中国語担当2名）が勤務している。カウンセリングが必要とする留学生の事案について、常に非常勤カウンセラーと話し合っている。すべての相談ケースに目を通した上で、適切なカウンセラーに接続し、必要に応じてスーパーバイズを行っている。

（2）来談状況

2022年度の留学生の年間相談者数と相談件数は表1の通りである（参考までに2016年度～2021年度の数値も併記した）。

来談者数と来談率は年々増加する傾向にある。近年になって発展途上国においてメンタルヘルスへの関心が高まっているため、多くの留学生にとってカウンセリングがより身近な存在になりつつあることが関連していると思われる。

一人当たりの平均面談回数が増えていることについては、コロナ禍において留学生が周囲の人々との関係が希薄になっていることによる影響だと考えられる。特に困った状況に陥った場合、先輩や同級生と交流する機会を持てず孤立した状況に陥った留学生が多い。

出身国・地域別の集計は表2の通りである。例年と同様に中国から来た留学生からの申し込みが最も多く、65名（52.4%）で約5割を占めている。次に多いのはヨーロッパ地域9名（7.3%）である。ここでは割愛しているが、別のデータから相談時に使用される言語によって相談内容の違いがみられており、また援助者への期待も異なることが分かっている。例えば、英語話者は精神医学あるいは臨床心理学の理論に沿って自分の問題について話す事例が多いのに対して、中国語話者は身体症状や他者への不満を中心に話す傾向が強い。また、各出身国・地域の教育理念、社会情勢が個人の学習意欲と進路選択に大きく影響している。留学生の環境適応および健康の維持増進をサポートするために、母国語による相談支援を提供することが重要である。

表1 全体の相談者数と相談回数および来談率

年度	相談者数	合計相談回数	一人当たりの 平均面談回数	来談率（留学生数）※
2016	65名	454回	7.0回	3.1%（2,089名）
2017	102名	855回	8.4回	4.6%（2,201名）
2018	85名	623回	7.3回	3.7%（2,313名）
2019	105名	707回	6.7回	4.4%（2,387名）
2020	91名	859回	9.4回	3.9%（2,328名）
2021	113名	1,279回	11.3回	5.0%（2,270名）
2022	124名	1,169回	9.4回	5.3%（2,361名）

※留学生数は各年度5月1日時点

表2 出身国・地域別

	アジア				中東	ヨーロッパ	アフリカ	北米	中南米	不明	合計
	中国	韓国	インド ネシア	その他							
人数	65	7	5	20	7	9	4	2	3	2	124
割合	52.4%	5.6%	4.0%	16.1%	5.6%	7.3%	3.2%	1.6%	2.4%	1.6%	100%

（3）相談内容

2022年度の留学生の相談内容は表3の通りである。来談内容（重複あり）は、「自分自身のこと」62件、「対人関係」42件、「修学・研究」31件、「進路」10件、「生活」7件であった。

「自分自身のこと」では、「メンタルヘルス」に関する相談が43件で非常に多く、コロナ以降から年々増えている傾向にある。不安や不眠を訴えて、クリニック等に紹介するケースが多かった。自傷他害のリスクがあって緊急入院を要する事案もあり、学内外の医療機関と連絡を取り、コンサルテーションを行った。例年と同様に、緊急入院に際しては、「医療保護入院」の措置をとるために、様々な工夫が必要となった。海外にいる保護者と連絡を取り、入院同意は取ったが、入院先が決まるまでに数日かかった。この間の本人の保護をどうするかが課題であった。また、「自分のあり方・性格」（17件）も多い。異文化の中で生活し、勉学にもストレスを感じるため、メンタルヘルスの維持が容易ではないし、自分自身のあり方や性格について考えることが多いと思われる。

「対人関係」では、「教員との関係」（9件）、「家族関係」（8件）、「友人関係」（7件）、「研究室での人間関係」（6件）、「異性関係」（5件）が多かった。研究室関連の相談は、2020年に一度減り、その後また増えている。オンライン中心から対面中心の生活に戻ってきたことと関連があると考えられる。周囲の日本人の学生や教職員とのあたたかい交流を期待してきたのに、現実においてコミュニケーションスキルの壁と文化の壁にぶつかった留学生は少なくない。

「修学・研究」では、「研究の悩み」（16件）が多く、「修学その他」（6件）、「履修不良」（4件）、「修学意欲」（4件）が続く。留学生は異国で勉学・研究を行っており、言語的問題や文化的な違いによ

り、研究に関するコミュニケーションが十分でない場合が多い。また、各国の教育システムの違いにより、必ずしも同じ内容の知識を持っているとは限らないため、日本人学生と同様に指導されても、研究が進まなくて教員の要求水準に達することができなかった学生がいる。

「進路」では、「就職不安」（５件）、「進路の迷い」（３件）、「転部転学科」（１件）があった。留学生は、卒業後に帰国するか、日本で就職するか、別の国に行くか、という人生上の大きな選択をしなくてはならず、不安を感じている人が多い。相談にきた留学生から「キャリア作りについての授業や相談資源をもっと増やしてほしい」という声が上がっている。

表３ 相談内容（2020～2022年度）

相談内容	2020年度	2021年度	2022年度
a 修学・研究	17	28	31
a-1 履修不良	1	6	4
a-2 修学意欲	3	5	4
a-3 研究の悩み	12	15	16
a-4 進級配属時のつまづき	0	1	1
a-5 修学その他	1	1	6
b 進路	8	9	10
b-1 進路情報収集	0	0	0
b-2 再受験	0	0	0
b-3 転部転学科	1	1	1
b-4 進路の迷い	4	3	3
b-5 就職不安	2	4	5
b-6 進路その他	1	1	1
c 対人関係	27	38	42
c-1 友人関係	7	2	7
c-2 異性関係	4	8	5
c-3 家族関係	4	9	8
c-4 教員との関係	3	7	9
c-5 研究室での人間関係	4	8	6
c-6 対人関係トラブル	2	3	3
c-7 対人関係その他	3	1	4
d 自分自身のこと	45	68	62
d-1 自分のあり方・性格	10	19	17
d-2 メンタルヘルス	30	44	43
d-3 身体の疾患・障害	5	5	2
e 生活	12	10	7
e-1 生活リズム・習慣	8	3	1
e-2 経済問題	1	1	1
e-3 その他トラブル	3	6	5
f その他・上記の分類以外	18	5	23
合計	127	158	175

3. 留学生相談における新しい変化

（1）オンライン相談の活用

九州大学には、伊都キャンパスの他、病院キャンパス、大橋キャンパス、筑紫キャンパス、その他の遠隔キャンパスが存在している。コロナ禍以前は、緊急事態を除き、カウンセリングを利用したい留学生が伊都キャンパスまで来る必要があった。2020年からオンライン相談を導入して、留学生がどのキャンパスでもカウンセリングを利用できるような体制が構築された。それに伴って、国内のみならず、渡航できなかった留学生や海外留学中の日本人学生に対しても、オンラインで支援できる展開となった。また、精神疾患を発症して緊急入院が必要な留学生について、オンラインミーティングを通して母国にいる親御さんやほかのご家族と迅速に連絡をとることが可能となった。

（2）多様なニーズと孤立しやすい環境

滞在期間が1年未満の短期語学研修生、交換留学生から学位取得のために長期滞在する留学生まで多種多様な留学生がキャンパスで学び生活している。直面する状況も経験する異文化接触も一人一人違うため、相談内容が千差万別である。

また、国際コースの設置に伴って、日本語未習のまま母国から直接入国した留学生が増えている。これらの学生は、大学では学生同士や教員とのコミュニケーションはほとんど英語で行うため、日本語との接触機会がほとんど得られないまま過ごしている。COVID-19の影響もあり、地域コミュニティの人々と触れ合う機会もなく、2、3年間住んでいても周囲の人とはあいさつなど個人的な話題に触れない程度の交流しかできず、疎外感を感じている留学生も少なからずいる。

4. おわりに

留学生への相談支援の目標は、留学生が「言語の壁」「文化の壁」「心の壁」を乗り越えて、日本人学生と対等な立場で学びながら自分自身の強さを見出して、多様なキャリアを形成できることである。この目標を実現するために、異文化適応支援、生活支援、健康支援、キャリア支援など多様な視点を取り入れて、一対一のカウンセリング体制を強化するとともに、学内外の関係者と連携ネットワークを構築し、国際共修授業や文化交流イベントなど多様な場を創出することが重要である。

令和5年度スーパーグローバル大学創成支援事業 学部生・大学院生共通基幹教育科目「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

Super Global University Initiative Lecture Series “Work in the World”

生 田 博 子*

1. はじめに

スーパーグローバル大学創成支援事業とは、国の政策として高等教育の国際競争力を向上させ、グローバル人材の育成を図るため、世界トップレベルの大学との交流・連携を実現、加速することを目標として、大学内の体制強化や国際化を進める大学を重点的に支援する制度である。トップ型大学13校（世界大学ランキングトップ100を目指す力のある、世界レベルの教育研究を行うトップ大学を対象）とグローバル化牽引型大学24校（これまでの実績を基に更に先導的試行に挑戦し、我が国の社会のグローバル化を牽引する大学を対象）が選拔され、本学はトップ型に選ばれた。本章では本学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として開講されている「学部生・大学院生共通基幹教育科目・世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」について報告する。

2. 「世界が仕事場Ⅰ&Ⅱ」

2.1. 目的

「世界が仕事場」は、九州大学留学生センターにおけるスーパーグローバル大学創成支援事業の一環として、グローバル人材とは何かを探究する日本人学生を対象に開講された授業である。一般に大学が提供する留学支援は、語学の授業、留学プログラムや奨学金制度の充実、留学カウンセリングなどが挙げられるが、学生の海外留学や海外でのキャリアへの興味を引き出し、涵養することを目的にしたカリキュラムの例は少ない。近年、日本人学生の海外留学の減少が懸念されており、留学目的や意識・意欲の変化などの理由が挙げられている。九州大学も例外でなく、スーパーグローバル大学調書では日本人留学生派遣促進に関する取り組みを提唱するも、留学希望者が増えないことへの懸念から、学生の自主性、広報活動だけに頼らず新たな取り組みが求められていた。本コースは、そのような状況を打開すべく、基幹科目として全学の学部生、大学院生、留学生を対象に企画したものである。

この授業では、単に短期留学や海外での研究経験があるというだけでなく、海外の大学や大学院で学位を取得し、世界の第一線で活躍している日本人（国連職員、研究者、NPO 代表、起業家、ジャーナリストなど）が、それぞれの仕事や生き様を語り、異文化や海外体験を含む、幅広い体験の意義や

*九州大学留学生センター准教授

意味を考え、グローバル社会での生き方のヒントを得ることを目的としている。学生たちには、海外で活躍する人々も、色々な事に悩み、失敗を重ね、試行錯誤しながら、国際社会の中でキャリアを築き人生を歩んできたということを知り、生き方の多様性を学ぶことを期待している。

この授業は2016年後期に始まり、8年目を迎える今年、累計で約2300名を超える学生が履修している。

2.2. 実践

本コースは①講師による講義と質疑応答、②「問いとコメント」、③グループディスカッションと発表、が3本の柱となっている。秋学期と冬学期に開講し、全16回の講義はオリエンテーション1回、外部招聘講師10名と本学教員2名による講義12回、グループディスカッション3回から構成される(資料1)。受講生は、毎回の授業で、講義に関する短いレポートの提出、ディスカッションへの積極的な参加が求められている。今年度は、学部生は秋学期128名、冬学期138名。大学院生は後期35名の301名が受講した。また聴講生が多く、本学教職員も積極的に聴講している。

2.3. 成果

本学の大学間交換留学申請者の多くは、本授業の受講生であり、学生や教職員から地球市民、グローバル人材を考える上で、大変有意義な講義であるとのフィードバックを頂いている。学外からの参加や見学などの依頼等も多い。

3. まとめ

本授業は、九州大学に在籍する日本人学生や留学生に、国際社会の現代における人生の選択肢、個々がグローバル人財として要素の探求などを狙いとしている。グローバル人材の育成や大学のグローバル化の達成にはさまざまなアプローチがあるが、学生の意識を変えていくことも大学の国際化に大きく貢献する。

(資料1)

スーパーグローバル大学創成支援事業

令和5年(2023)年度 秋冬学期・後期 学部生・大学院生共通基幹教育科目



君は、世界で活躍する先輩にどんな夢を抱いたのか聞いたことがあるか？

本コースでは、多様な分野の第一線で活躍する講師が、人生やキャリアについて語る。異文化や海外体験を含む幅広い体験の意義や意味を考え、グローバル化の進む現代社会での生き方のヒントを得よう。

授業は、アクティブラーニングをもとに

- ① 講師による講義と質疑応答
- ② 「問いとコメント」
- ③ ディスカッション を3本の柱とする。詳しくは、後期シラバス参照のこと。

曜 限：水曜日4限
対 象：学部生・大学院生
教 室：2404教室（センター2号館4階）
単 位：学部生：秋学期（Ⅰ）冬学期（Ⅱ）各1単位
大学院生：後期 2単位

講 師 紹 介 (1)

10月4日は、イントロダクション

10月25日、11月22日、1月17日、2月7日は、ディスカッション



10月11日「記者の仕事、変わるメディア」

永田 エ (朝日新聞記者)

一橋大学卒業

事件取材する記者としてキャリアを重ね、現在はデスクとしてニュース発信に携わっています。各地で経験した取材の様子、インターネットの発達とともに激変するメディア業界の現状や携わっている仕事についてお伝えします。



10月18日「私たちが世界に貢献できることは何だろうか？」

森木 亮太 (一般社団法人NTDs Youthの会 代表)

九州大学卒業 大分大学医学部在学

私は7年前「世界が仕事場」の受講生でした。薬学部卒業後、医学部へ編入学し、現在はゲイツ財団から拠出を受けて、熱帯病のアドボカシー活動に取り組んでいます。私たちが世界にどう貢献できるか、一緒に考えてみませんか。



11月1日 “The Professional Stranger: An Anthropological Life of Learning”

Alexander D. King (Anthropologist)

Reed College B.A. University of Virginia M.A. Ph.D.

前職 : Max Planck Institute etc.

Anthropologists live in a community for an extended time and get to know a people, their culture, language, and society. It opened my eyes to the possibility of scholarly adventures among people different from myself.



11月8日「地図を毎日眺めています」

木田 新一郎 (九州大学准教授・海洋物理)

東京大学B.S. マサチューセッツ工科大学M.S. Ph.D.

前職 : 海洋研究開発機構他

私は海の研究者ですが、ほぼ毎日のように地図を眺めています。地球科学の研究者は地球が研究対象だけで世界を相手に仕事をしている、というわけではありません。留学体験を交えながら研究者の世界ではどう地球を科学しているのか、お話しします。



11月15日「クジラをめぐる冒険」

石川 創 (大阪海洋研究所 獣医師)

日本獣医畜産大学・同大学院卒業

前職 : 日本鯨類研究所他

水族館職員から始まり南極海での調査捕鯨、鯨の研究室長、イルカ獣医師と様々な仕事に就きましたが、未だに人生の冒険の終着点は見えません。鯨を通じて考えた多様性のありかたについてお話ししましょう。

講師紹介(2)



12月6日「21世紀の北極圏：気候変動、開発、伝統の中で」

生田 博子 (九州大学准教授・人類学)

アラスカ大学B.A. M.A. アバディーン大学Ph.D.

前職：米国アラスカ州政府野生動物管理局他

20代半ば、東京の金融機関で働いていた私は、北極圏に行きたくて退職。アラスカで学生時代を送り、米国政府の研究者として約20年間生活した。現代社会における先住民の狩猟生活と資源開発、持続可能な社会、海外でのキャリア等、共に考えよう。



12月13日「パキスタンでの禅問答が私の原点」

長野 剛 (朝日新聞総合サービス(株)次長)

京都大学・同大学院卒業

「我々は神が見ているから悪事はしない。無宗教の君は?」。学生時代、旅先で浴びせられた質問の嵐。即答できず悩み、考え続けた経験は、後に新聞記者になってからも生きました。考えることの大事さを語り合いましょう!



12月20日「持続可能な世界への夢を追う」

手島 利夫 (ESD・SDGs推進研究室長)

早稲田大学・青山学院大学卒業

前職：江東区立八名川小学校長

東京下町生まれの少年が教育への道に迷い込み、ユネスコスクール、ESD等との出会いを通じて広がった教員人生。ライフヒストリー・デザイン曼荼羅を使いながらお話ししましょう。



1月10日「デジタルマーケティングを20年やって思うこと」

伊東 周晃 ((株)JADE代表取締役)

京都大学卒業

前職：(株)ぐるなび他

私の大学生時代に「デジタルマーケティング」という職種は存在しなかったのですが、縁あって約20年の間、その職種で仕事をしてきました。ネットサービスの進化や今後の見通しを語りながら、皆さんの将来の人生の選択に役立つお話ができればと思います。



1月24日「国際団体の中から外から『事実』を伝える」

佐久間 淳子 (ジャーナリスト)

前職：週刊誌記者、グリーンピース・ジャパン他

高校生時代に報じる者を目指しました。なれはしなかったけれど、新聞記者では追い切れない「事実」があることに気づき、情報発信側である国際環境団体の「広報」に。言葉の壁よりも、先入観の壁のほうが、厄介でおもしろい!



1月31日「円満退社をしたくて渡ったフランスでの生活」

村井 浩二 (なにわフレンチびざん オーナーシェフ)

前職：(仏)ラ・フェルム・サン・シモン他

どんな料理でも作らせてもらえれば幸せだった社員食堂の18歳。厳しい修行時代から逃れる様に渡仏を決意した25歳。パリの星付きレストランで働いた26歳。現在のオーナーシェフの立場に至るまでを料理を背景に話します。

九州大学農学部国際プログラムにおける 優秀な人材の確保に向けた取り組み

Efforts enhancing the Recruitment of outstanding high school students of the International Undergraduate Program in Bioresource and Bioenvironment, Kyushu University

房 賢 貞*

中 村 真 子**

1. はじめに

九州大学農学部国際コースは2010年に国際化拠点整備事業「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業（グローバル30）」[1]にて設置され2023年度で14期を迎える。九州大学は事業当初からASEAN 諸国等8カ国（中国、韓国、台湾、ベトナム、タイ、インドネシア、エジプト、オーストラリア）を重点地域として選定し、高校生のリクルート活動を行ってきた。しかし、新型コロナウイルス19の影響で日本における留学生数は激減し東南アジアからの留学生数は2019年と2021年を比較すると31.1%も減少した[2]。新型コロナウイルス19は九州大学農学部国際コースにも影響を与え合格者に対する入学者の割合は2021年度に31.3%、2022年度に27.3%に減少した（図1）。

著者らはこの入学者減少状況を打破するため2022年度はオンラインを駆使し以下の2点の取り組みを行なった：① 受験対象者に対しメール等で直接アプローチを行う。② 合格発表後も合格者に対しフォローアップを行う。

本稿では、取り組みの概要および2023年入試に与えた影響を考察する。

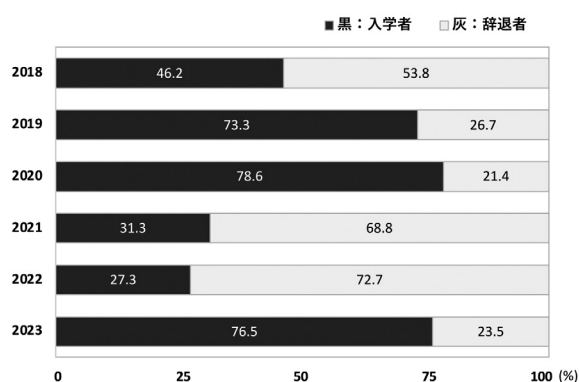


図1 合格者に対する入学者の割合
(2021～2023)

*九州大学大学院農学研究院・助教

**九州大学大学院農学研究院・教授（留学生センター兼任）

2. 学生リクルート活動

2. 1. これまでの取り組み

新型コロナウイルス19以前は、重点地域における独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）主催の留学フェアや現地の高校を直接訪問するリクルート活動を行っていた。コロナ禍の2020年度から Webinar を活用したリクルート活動への転向を余儀なくされた。

しかし、多くの Webinar は学部融合型での参加を求められ、農学部のみならず学部生インバウンドプログラムを持つ工学部や共創学部との合同実施、もしくは学部と大学院の合同リクルートイベント農学部国際コースを強調するには不十分であった。また、情報発信は大学側からの一方向性であり受信者を農学部に興味を持つ高校生に限定する事も困難な状況であった。このような受け身形のオンラインリクルート活動が2021-2022年度の入学者減の主要因であると考察した。

そこで著者らは本状況を打破するため、前述2点を改善ポイントとし、潜在的な受験生の顕在化を目指し双方向型の情報配信を開始した。

2. 2. 独自 Webinar 「Be Bio with Kyudai !」の立ち上げ

コロナ禍でも様々な組織が主催する Webinar にてコースの紹介を継続したが前述通り入学者確保には至らなかった。そこで、農学部、また農学部国際コースの魅力を伝えることを目的に、農学部の独自 Webinar 「Be Bio with Kyudai ! (以下、本 Webinar とする)」を立ち上げ双方向型リクルート活動を施行した。九大農学部国際コースの魅力や農学部で何を学べるのかを十分に伝える機会を作ることによって受験者数および入学者数確保を目指した。

2. 2. 1. 実施概要

本 Webinar は2022年6月から12月まで毎月1～3回、全17回を開催した（図2）。主に、Zoom（ミーティングモード）を活用し3区分構成とした。まず、九州大学をはじめ、農学部、国際コースについて紹介する General Information を設置した。このプログラムでは、KYURIIOUS¹（キュリアス：農学系部局国際推進室学生スタッフ）との協力で、学生生活に関する紹介を一緒に行った。

次に、大学で学ぶ内容を高校生レベルまたは、

Be Bio with Kyudai!
Bioresource and Bioenvironment

2022 Event Schedule

	General Information (5pm - 6pm JST)	Mock Lecture (3pm - 4pm JST)	Admission Special (Time TBA)
June	Jun. 10		
July	Jul. 8	Jul. 23	
August	Aug. 5	Aug. 27	
September	Sep. 9	Sep. 17	Sep. 24
October	Oct. 14	Oct. 22	Oct. 29
November	Nov. 11	Nov. 19	Nov. 26
December	Dec. 9	Dec. 17	

Mock Lecture Series

Date	Tentative topic keywords
Jul. 23 (Sat)	Bioresource and Bioenvironment; Molecular Biology, Protein, Biotechnology
Aug. 27 (Sat)	Crop Science; Abiotic Stress of Plant, Epigenetics
Sep. 17 (Sat)	Environmental Engineering; Water quality, Hydrologic models
Oct. 22 (Sat)	Insect Science; Sanitary entomology, Medical insects
Nov. 19 (Sat)	Marine Resource; Sexual plasticity in fish, Stem cell
Dec. 17 (Sat)	Postharvest Science; Smart Food Value Chain

A certificate of participation will be given to those who attend ALL 6 mock lectures.
*There may be changes in the topics and keywords above.

図2 独自 Webinar の開催スケジュール

1 <https://www.kyurrious.agr.kyushu-u.ac.jp/>

高校生が理解できるように工夫して伝える Mock Lecture を設けた。高校生にとっては農学部で学ぶ内容が体験できると共に、優れた大学の研究者と直に質疑応答ができる魅力的なイベントであり、全6回実施した。

これに加え3つ目に入試プロセスに特化した内容を紹介する Admission Special Session を設けた。農学部国際コースのアドミッションポリシーを基盤に入試プロセスに関する詳細な説明、注意すべき点、日程、奨学金に関する案内を含むものとした。Admission Instruction は毎年9月に公開されるため9～11月まで3回実施した。

2. 2. 2. 周知方法

2021年度末に2022年度年間活動計画を決定させ、従来通り国内インターナショナルスクール、海外インターナショナルスクールと STEM 高校へのポスター郵送とともに SNS を通じた告知手段を加えた。

Facebook・Instagram の有料告知の導入し重点国（ASEAN）をはじめ、中東エリア、欧米といったコロナ前までは物理的に制限があった諸外国にまで情報が伝わるよう工夫した。しかし、各国の Facebook ポリシーによって狙っている年齢層にアプローチできない国もあった。その国に対しては、スクールカウンセラーなどにコンタクトできるように Facebook におけるスクールカウンセラーのグループに参加し、情報配信を試みた。Facebook・Instagram における配信では、同じデザインの画像を活用することでイベントの一貫性を保った。

2. 2. 3. 個別面談の導入

年間活動計画に沿った Webinar 開催後に参加者から問い合わせを受けることがあり、Webinar 終了後に個別面談のコーナーを設置した。農学部国際コースの入試は12月下旬のインターネット出願から開始されるため、出願が開始されるタイミングを目処に、Webinar で登録のあった高校生に直接を周知し、出願方法に関する個別相談を受け。潜在的な受験者に直接つながることで出願に繋がるよう個別対応を行った。

2. 3. 合格発表後のフォローアップ

Webinar で本学が求める人材像について共有するとともに、入試の面接段階でも本学の魅力をアピールするなど、優秀な学生を獲得するため本学を選んでもらえるような工夫も重ねた。

2. 3. 1. 実施概要

具体的な実施内容は、本部からの合格通知があった翌日、農学部国際コースから合格を祝うメッセージ（個別連絡）と Welcome Event を開催することを知らせ、参加を促した。

Welcome Event は2023年4月8日（土）、オンラインで開催した。このイベントは Zoom ではなく Spatial Chat (<https://www.spatial.chat/>) を活用した（図3）。

2. 3. 2. 双方向間疎通のための工夫

Welcome Event のメインステージ空間と大学生活に関連する様々なテーマ（IUP コース、部活や学生コミュニティ、授業料・奨学金）について話せる空間を3つ用意し、双方向でコミュニケーションできるように空間を演出した。特に、各空間では日本の四季を感じられるように、イベント空間では

各季節の風物詩（花見、花火、月見、正月）の風景を背景として採用した。

さらに、Spatial Chat では参加者が能動的に動ける機能を活用し、自由にイベントを楽しみながら参加者自ら、積極的にコミュニケーションするように促した。

3. 実施結果と考察

3. 1. 潜在的な受験者の顕在化に成功

3. 1. 1. Webinar 区分と参加者の興味

Webinar は予定通り 3 つの異なるテーマで実施した；General Information 7 回、Mock Lecture 6 回、Admission Special 3 回（全17回）。Webinar に登録した人数は372名、うち高校生は187名（50.3%）であった（重複登録含む：表1）。

各 Webinar における高校生の登録者数はそれぞれ、General Information 147名中58名（39.5%）、Mock Lecture 187名中101名（54%）、Admission Special 38名中28名（73.7%）であった。この結果から高校生は Mock Lecture と Admission Special により興味を持っていると考えられる。また、実際の参加者も Mock Lecture と Admission Special において高校生率が高かった。

3. 1. 2. Webinar 高校生の参加状況

Webinar 開催により得られたメールアドレスは222名分、うち高校生は61名（28%）であった（図4）。高校1年生5名、高校2年生4名、高校3年生17名、学年不明者が35名であった。Webinar 開始初期は学年登録を不要としたため、一定数の既卒者を含む学年不明者を得た。

学年に関する情報を得た事で2023年度の志願を直接促す対象者を確保できたと言える。また、次年度以降の潜在的な受験者顕在化に成功した。

3. 1. 3. 個別面談の実施

出願に関する質問受付用を実施した個別相談では、12月末に Webinar 参加者から申し込みがあった。当該者は出願に至った。

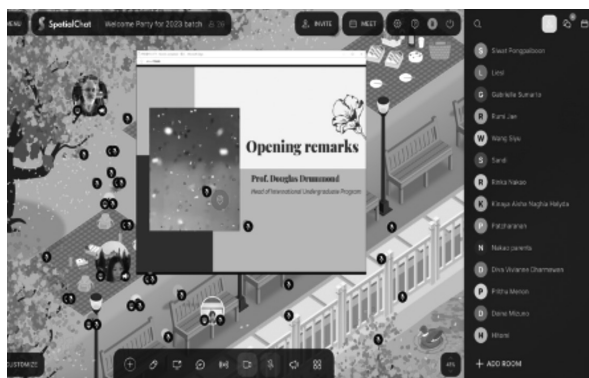


図3 双方向コミュニケーションのための工夫：Spatial chat における花見の背景

表1 Webinar の区分と参加した高校生の興味

登録・参加者 Webinar 区分	全登録者数 (単位：名)	登録した高校 生数 (単位：名)	登録した高校生 数／全登録者数 (単位：%)	参加した高校 生数 (単位：名)	参加した高校生数／ 登録した高校生数 (単位：%)
General Information	147	58	39.5	33	56.9
Mock Lecture	187	101	54.0	59	58.4
Admission Special	38	28	73.7	17	60.7
合計	372	187	50.3	109	58.3

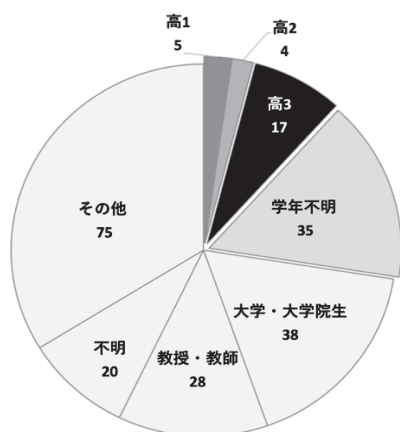


図4 Webinarに登録した高校生

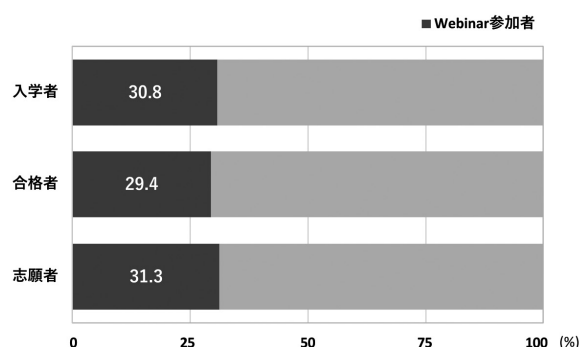


図5 入試プロセスにおける Webinar 参加者の割合

3. 2. 合格後のフォローアップ

3. 2. 1. 2023年度入試の結果

2023年度入試では合格者14名に対し1名の辞退者を除き13名が入学した。全志願者の31.3%、合格者の29.4%、入学者の30.8%がWebinar参加者であり入試プロセス全体を通じて約30%の学生が本Webinarの影響で志願、入学まで繋がったと考えられる(図5)。

3. 2. 2. Welcome Event と合格者登録推移

Welcome Eventでは、合格通知を受けた学生(14名)をはじめ、その家族(親、兄弟)にも参加者が見受けられた。国際コースの教員や在学生、コース担当スタッフが同席し、学生らの疑問点に対して関連なコミュニケーションが行われた。Welcome Eventの開催までに10名が入学手続きを完了していたが、Event後にさらに登録が増え(4名)、最終登録者は14名(イベント未参加者1名を含む)であった(表2)。合学者のみならず、保護者や兄弟も参加可能な形式とした事で関係者全員が抱えている学習、異国での生活に関する様々な情報が得られたこと、将来への具体的な姿が描ける対応が入学者増に繋がったと考えられる。

表2 入学登録者の推移

入学登録者推移	人数
Welcome Event 前の登録	10
Welcome Event 後の登録	4
入学者(2023.10.)*	13

* 個人的な事情により入学登録後辞退(2023年5月)

4. おわりに

2022年度初めて実施した独自のWebinar「Be Bio with Kyudai!」は、農学分野、農学部国際コースの学習内容や魅力に焦点を当てて実施した初の事例であり、多様な国の多くの学生が興味を示していることが分かった。今回の実施と結果で、可能性が確認できたので、この活動を継続することで、農学分野における具体的なビジョンを持った優秀な学生リクルートに務めていきたい。2024年度入試に向

け Webinar 実施を継続すると共に、高校生を大学へ招くプログラムを併用することで、より積極的に魅力を伝える仕組みを企画検討中である。

謝辞

本報告書作成にあたり、農学部等学生課留学係長・居石玲子氏、農学系国際推進室の梶原健司氏、塩塚真由美氏、国際農業教育・研究推進センター国際教育ユニットの皆様（Douglas Drummond教授、荻野由紀子准教授、William KF TSE 准教授、Ta Viet Ton 准教授）に感謝申し上げます。

引用

1. 国際化拠点整備事業（グローバル30）、国際化拠点整備事業（平成22年度取組）（最終アクセス：2023.11.24）https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/1383342.htm
2. 内閣官房第5回 教育未来創造会議ワーキング・グループ 配布資料、資料3. 参考データ集「コロナ後の新たな留学生受入れ・派遣計画に関して」（最終アクセス：2023.11.24）https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kyouikumirai/sozo_mirai_wg/dai5/siryou.html

ヘブライ大学とのオンライン COIL プログラム実施報告

Online COIL Program with Hebrew University of Jerusalem Implementation Report

木 下 博 子*

はじめに

本稿は、2023年度春学期に開講した Hebrew University Jerusalem (HUI、以下、ヘブライ大学) とのオンライン COIL プログラム実施報告である。本プログラムは筆者が担当する短期海外派遣プログラムである College of Asia Pacific Program (CAP) の一環である。本学の海外派遣プログラムが実施中止となっていたコロナ禍の2021年に、ヘブライ大学からの要望を受けて企画・立案され、2022年度から開講している。

オンライン COIL プログラム概要

ヘブライ大学と本学は、2020年より大学間学術協定および大学間学生協定を締結した。コロナ禍における学生のモビリティ低下に対する打開策として、ヘブライ大学人文学部長の Nissim Otmazgin 教授よりオンラインでの学生交流プログラムの要望があり、同じく人文学部およびハリー・トルーマン研究センターの Helena Grinshpun 准教授、本学国際戦略企画室の許斐ナタリー教授と筆者間で協議を重ね、双方の大学がそれぞれの大学に科目登録し、プログラム参加学生は所属大学において履修する COIL プログラム形式を採用した。

学年暦の違いを考慮し、2023年度はヘブライ学は第二学期科目 (Second Semester)、本学は春学期開講のクォーター科目として開講をした¹。ヘブライ大学の学年暦では、新学期にあたる第二学期は3月から6月までであり、多方本学学年暦では、新学期の開始は4月である。プログラムを実施するためには、どちらかの大学が開講時期を前後させる必要があるが、注釈に示している通り2022年度の経験から、双方にとって開講時期の調整は困難であると判断し、重複する講義日程が最も多くなる本学の春学期に実施することに決定した。両大学における講義情報および講義カレンダーを以下に示す。

*九州大学留学生センター准教授

1 2022年度は本学も前期科目 (全体で15コマ) として開講し、ヘブライ大学の学年暦に合わせて、3月より講義を開始した。しかし、本学の春季休業中の開講となり、本学学生の応募や参加が僅少であったことを受け、2023年度は春学期のクォーター科目として開講することを決定した。

図表 1 講義カレンダー

Date	Kyushu University	Hebrew University Jerusalem
March 15		Introduction: Course Orientation and Ice Breaking Session
March 22		Social Institutions in Comparative Perspectives
March 29		Family and Community
April 5		
April 12	Orientation	
April 19	Family and Community	
April 26	Follow up session	
May 3		Education: Kindergartens and the way They Shape Individual and Social “Self”
May 10	Religion: Rituals and the Social Life	
May 17	The Government as a Social Institution: Looking at the Case o Police and Crime	
May 24	Difference in “Embarrassment”	
May 31	Media: Mass Media and Its Power to Influence	
June 7	Being Alone and Social Pressure to Conform	
June 14		Social Networks: How Do They Change Our Daily Lives and Communication Patterns?
June 21		The Role of Technology from Cell Phone to Social Robots
June 28		Robots and us: Social, Cultural, and Psychological Perspective

出典：筆者作成

〈講義情報〉

九州大学

Course title : Culture Difference and Social Change in Japan and Israel (基幹教育総合科目)

開講日時 : 春学期 水曜日 4 限 (14 : 50 ~ 16 : 20) 1 単位

受講者数 : 9 名

ヘブライ大学

Course title : Cultures In Comparison : Social Institutions, Communication, And Technology In Japan
And Israel (人文学部アジア学専攻開講科目)

開講日時 : 第二学期 水曜日 1 限 (8 : 30 ~ 10 : 15) 2 単位

受講者数 : 20 名

図表 1 に示したように、本 COIL プログラムは 4 月から 6 月にかけて、合計 6 回の合同授業を実施した。4 月上旬はイスラエルにおける祝祭日と重なったため、最初の合同授業は 4 月 19 日となった。本学においては、ヘブライ大学が休講の 4 月 12 日、26 日のみ対面授業とし、筆者によるオリエンテーションとフォローアップを実施した²。

本学の 4 限開始時刻は 14 時 50 分であり、イスラエル時間では 8 時 50 分にあたる。ヘブライ大学の 1 限は 8 時 30 分開始であり、本学の 3 限終了時間であるため、本学学生の教室移動やオンライン授業受講環境の整備等を踏まえて、14 時 40 分～ 45 分から講義を開始するなど、余裕をもった調整を行った。本学学生が入室するまでは、筆者と Grinshpun 准教授がヘブライ大学学生からの質問に応答する等の対応をとった。

合同授業では、各回に特定のトピックをとりあげ、これに関連する日本とイスラエルの事例を筆者と Grinshpun 准教授が紹介した後、グループディスカッションを実施した。成績評価については、本学は 1 単位科目、ヘブライ大学は 2 単位科目として開講しているため、各大学が独自に行った。

おわりに

2023 年度の本プログラムは、すでに海外渡航制限が大幅に緩和された状況であったため、オンライン講義の需要低下のさなかで開講した。しかしながら、本学から参加した学生の多くが、ヘブライ大学学生と積極的に交流をし、講義外でも本プログラムに参加している学生同士のソーシャルネットワークワーキングサービス上のグループでチャットをするなど、交流が続いた。本稿執筆時点では、来年度の開講は未定であるが、コロナ禍におけるオンライン COIL プログラムの礎石となったことは指摘したい。

2 オンライン受講環境構築のため春学期中を通じて教室を確保した。

College of Asia Pacific in Guam 2023 実施報告書

College of Asia Pacific in Guam 2023 Implementation Report

木 下 博 子*

はじめに

本稿は、2023年8月に実施した夏季短期海外派遣プログラムである College of Asia Pacific in Guam の実施報告である。まず、プログラム概要、スケジュール、参加学生について概観する。次に、参加学生によるプログラム事後アンケートに基づいてコロナ禍にオンラインで実施した過去3回のプログラムを経て初の現地実施となった今年度のプログラムについての考察および総括の後、今後の展望について記述する。

1. College of Asia Pacific in Guam について

College of Asia Pacific (以下、CAP) は、広域アジア地域における共通の社会課題について、多様な講義やフィールドトリップ (hands-on) を通じて学ぶ国際体験型の短期海外留学、および国際協働教育プログラムである。CAP では、PBL (Problem Based Learning : 問題基盤型学習) と TBL (Team Based Learning : チーム基盤型学習) を重視し、参加学生が主体的に学びを深め、異なる考えや社会的背景をもつ者同士の知的交流促進を目的としている。また CAP は、将来的に、大学間および部局間交換留学、学位取得を目的とした研究留学といった中長期の留学を目指す学生にたいする第一歩として位置づけられる。プログラムは、アジア太平洋地域の大学をパートナー大学とし、毎年、本学の夏季休業期間中に実施している。なお、2021年度までの募集は、本学協定校をはじめとする外国大学の学生も対象としていたが、2022年度より本学学生のみを募集の対象とした。

CAP は、2020年度～2022年度までの過去3年に渡り、ハワイ大学マノア校をパートナー大学とし、オンラインでコロナウイルス感染症のため実施してきた。2023年度は、新たにパートナー大学にグアム大学 (University of Guam、以下 UOG) を迎え、UOG で実施した。

UOG は夏季と冬季のセメスターブレイクを利用し、東アジア諸国を中心に多くの短期留学生受け入れ実績のある大学である。英語習得を目的とした短期から通年のプログラムのみならず、マネージ

*九州大学留学生センター准教授

メントや看護師を対象とした短期プログラムを実施している¹。こうしたプログラム運営を担当しているのが、UOG 内の Global Learning and Engagement チーム（以下 GLE チーム）である。GLE チームは、UOG 内で独立したユニットであり、5 名の常勤職員と複数名の非常勤職員および学生スタッフによって運営されている。CAP in Guam においては、本学側はコーディネーターである筆者と国際部留学課海外留学係、UOG 側は GLE チームが協力し、プログラム運営にあたった。

本プログラムは基幹教育総合科目（2 単位）として開講され、講義、フィールドトリップ、および最終評価は UOG 教員と筆者が共同で実施した。

2. スケジュール

CAP in Guam の募集から実施までのスケジュールは以下の通りである。

募集：2023 年 4 月 3 日～5 月 10 日

書類選考：2023 年 5 月 11 日～5 月 15 日

事前講義：2023 年 6 月中旬～2023 年 8 月上旬

事前オリエンテーション：2023 年 8 月 9 日

プログラム実施：2023 年 8 月 20 日～2023 年 8 月 31 日

アンケート提出期間：2023 年 9 月 1 日～2023 年 9 月 7 日

本プログラムの募集開始は通常 4 月上旬であり、新入生および新学期を迎える慌ただしい時期であるため、毎年 4 月下旬に開催される留学フェア以降も 6 月上旬頃までの約 2 ヶ月間を設定している。しかし、今回利用したユナイテッド航空の搭乗人数確定日の都合上、今年度は募集締切日を繰り上げて設定する必要が渡航にあった。そのため、募集締め切りから選考、事前講義までの期間が極めて短くなる事態となった。

また、今年度は現地実施の再開ということもあり、多様な媒体を用いた積極的な広報活動を実施した。具体的には、Campus mate-J のポータル配信（海外留学情報）、海外留学フェア出展、国際部ウェブサイト告知、九大生協学食トレイ広告、募集ポスターの配布、各部局学生係への広報協力依頼である。

その他、他の職務に並行して、本プログラム運営に関与する教職員の極めて限られたリソースを有効活用するために、応募者および参加学生への諸連絡については Microsoft forms での応募受付、提出書類の電子データのクラウドへのアップロード、Slack による各種連絡・情報共有などの方法を取り入れた。これにより、電子メールを利用した応募受付やその後の連絡に要する時間を大幅に短縮できたと考える。

1 University of Guam ウェブサイト (<https://www.uog.edu/>) (2023 年 11 月 20 日アクセス)

3. 参加学生内訳

2023年度は上記の募集期間中22名の応募があった。選考の結果22名全員を合格としたが、後述の円安の影響によるプログラム費の高騰や、選考上位者に対する奨学金支給額の変更といった理由により6名の学生が辞退した結果、16名の学生が参加した。参加学生の学部、学年の内訳を表1に示す。

表1 CAP in Guam 参加学生内訳

学部 / 学年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	学部小計
共創学部	1			1	2
教育学部			1		1
経済学部		1		1	2
理学部		1			1
医学部	3				3
工学部	1				1
芸術工学部	1				1
農学部	1	2	1	1	5
学年小計	7	4	2	3	合計16

出典：応募資料をもとに筆者作成

本プログラムは夏季休業期間中に実施することもあり、傾向として参加学生の多くが1年生および2年生の低年次である。しかし、2023年度においては、渡航を伴う短期派遣プログラムが再開したことを受け²、過去のプログラムでは、卒業論文執筆や就職活動のためほぼ参加のなかった4年生が数名参加した。この背景には、海外渡航が極めて厳しく制限されていた2020年から2022年秋頃にかけて留学機会を得られなかった学生が参加したと考えられる。

4. プログラムの考察および総括

本項では、参加学生に対して実施した事後アンケートの内容およびプログラム期間中に参加学生と交わした対話内容、そして筆者が本プログラムをコーディネートする過程において体験した出来事をもとに、本プログラムを振り返りたい。なお、アンケートは無記名式とし、Microsoft forms を利用した。回答送信数は16であった。

4. 1. プログラム参加の動機

参加の動機として最も多かったのが、英語能力の向上と留学経験を積むことの2つであった。以下に、自由記述欄に記入された内容から抜粋して紹介する。

2 留学生センターが所掌する短期海外派遣プログラムにおいて、現地開催を再開したプログラムではASEAN in Today's World (AsTW) が最も早く、2023年3月にタイのマヒドン大学で実施した。

「英語でのコミュニケーションスキルを向上させたかったから」

「実際に海外に行って英語力を磨きたいと思ったから。また、海外の大学生と交流してみたいと思ったため」

「日本にいただけでは英語力を伸ばすことに限界があると感じ、留学をすれば強制的に英語を話す環境下に自分を置くことで、スピーキング力が高まると考えたため。期間も短めでちょうど良かったから」

「海外留学を一度してみたかったから」

「海外への留学に興味があり、まずは短期から経験してみたいと思ったから」

「コロナの関係もあり、大学生活で海外に行く機会に恵まれず、大学生活一度は海外に行きたかったが、海外経験がないためこのような大学のプログラムを利用したかった」

(参加者アンケートより抜粋)

特に、留学経験を積むという参加動機については、コロナウイルス感染症が影響していると考えられる。これまで、低年次学生においては、高校在籍時の修学旅行で1週間程度の海外経験がある学生が複数名いたが、今年度の低年次参加学生は、修学旅行先が国内に変更となり、海外経験のないまま大学に入学している。また、高年次参加学生は、入学後すぐに全ての講義がオンライン実施となり、対面講義が再開してからも、断続的な緊急事態宣言の発令により講義形式がオンラインに変更となるなど、変則的な大学生活であった。海外渡航も厳しく制限されていたことから、留学はもとより、長期休業期間を利用した個人的な海外旅行すら体験しないままであったという³。そのため、本プログラムへの参加が卒業前の最初で最後の海外体験であるという学生もいた。

4. 2. プログラムに参加して得られたと考える成果

次に、プログラムに参加して得られた成果として最も多くあがったのが、学部・学年を超えた交流ができた点である。以下同様に自由記述欄に記入された内容を抜粋して紹介する。

「英語で授業を受けたり現地の文化を知ることができたりしてとても良い経験になった。また参加者と学部、学年を超えて仲良くなれて嬉しかった」

「海外という環境はもちろんですが、一緒に参加したメンバーから様々な良い刺激をもらったこ

3 筆者と参加学生との個人的会話に基づく(2023年8月21日)。

とは本当によかったです」

「学年、学部の違う人たちとさまざまなことを話す機会があったこと。また、ネイティブの英語をたくさん聴く機会が得られたこと」

「他学年、他学部の方と交流ができた点。海外の大学の授業を体験できた点」

(参加者アンケートより抜粋)

筆者がコーディネートを務める短期海外派遣プログラムでは、リーダー／副リーダーをそれぞれ1名ずつ選出し、リーダー／副リーダーを中心に海外経験の少ない学生や、低年次学生のサポートといった自助的グループを形成している。学生の多くは、大学生活において部活動およびサークル活動において、学部・学年を超えた交流を体験する。しかし、コロナ禍においてこのような活動が大幅に制限されたことを受け、特に高年次学生にとっては、学部・学年を超えた交流機会が極めて少なかった⁴。そのため、複数人で同じ場と時間を一定期間に渡って共有できる機会が本プログラムであったと指摘できる。

4. 3. 運営において直面した課題

3年ぶりの現地実施となった本プログラムでは、運営において複数の課題に直面したことも事実である。具体的には、自然災害によるプログラム内容の変更と急激な円安によるプログラム費の高騰である。今後の短期海外派遣プログラム運営のためにも、参考資料となるよう記して残しておく。

まず、自然災害によるプログラム内容変更である。UOGは、2023年5月下旬に発生した大型台風「マウワー」によりキャンパスや附属施設が壊滅的な被害を受けた。被害直後はグアム全土が停電し、インターネット接続も切断され、GLEチームとの連絡手段が断たれた。5月下旬から6月にかけては、学生選考やプログラム費の送金、実施に際する覚書の締結を端緒とする綿密な連絡と調整が必要とされる作業があったが、ほぼストップした状態であった。時折GLEチームの携帯電話から簡単なメール返信がある以外は連絡手段がつきってしまった。加えて、グアム全土のインフラ復旧に時間を要したことも影響し、プログラムの実施自体が危ぶまれたものの、UOGおよびGLEチームの尽力により、無事現地開催することができた。多方で、プログラム実施期間中も現地は復旧作業、復興のさなかであり、予定していたフィールドトリップを急遽変更するなどの事態が発生した。

次に急激な円安によるプログラム費の高騰である。筆者がUOGおよびGLEチームと交渉を開始した2022年、12月当初、1 USドルは135円～136円で推移していた。しかし、プログラム実施直前の2023年7月には1 USドルは144円～145円へと急激に円安へと推移し、約半年で1 USドルが10円近く値上がりした。これに伴い、プログラム紹介動画(2023年3月作成)や、留学フェア(2023年4月下旬)で説明していた日本円換算のプログラム費用が高騰し、経済的事情から複数名の辞退者がでる結果に

4 筆者と参加学生の個人的会話に基づく(2023年8月20日)。

繋がった。また、インフレーションが加速するグアムでは、コンビニエンスストアでの雑貨、食料品の買い物も円換算すると高額になり、日本からレトルト食品を持参し、期間中の食事に充てた参加学生もいた。

以上のように、本プログラムは、自然災害と外国為替という個人や大学という組織だけではどうすることもできない予測不可能な事態に直面することとなった。

多方で、アンケート結果にも反映されているように、学部・学年を超えた交流機会をプログラムの参加成果として指摘した学生が多くいることは、コロナウイルス感染症後の短期海外派遣プログラム運営として新しい観点である。

5. 今後の展望について

最後に、2023年度のCAPプログラムを終え、CAPプログラムのみならず短期海外派遣プログラムも含めた今後の展開について私見を述べたい。

筆者自身、短期海外派遣プログラムのコーディネーターとしての経験は少ないが、少ないながらも感じることで、この数年間で、短期、中長期といった期間を問わず海外留学そのものへのハードルがあがっている。その主たる背景の一つが経済的要因である。本稿の冒頭で述べた通り、CAPプログラムは将来的に中長期の留学を目指す学生の第一歩として位置づけられている。しかし、円安による留学費用の高騰によって短期海外派遣プログラムも同様に費用が高騰し、在学期間中に短期海外派遣プログラムに参加するのが関の山であり、中長期の留学は検討すらできないという学生も少なくない。今年度のプログラム参加学生も、本プログラムに参加したので、今後在学中に留学予定はないと回答した学生が数名いた。

以上の私見を踏まえ、今後短期海外派遣プログラムのみならず、海外留学者数を増加するためには、学生に対する経済的支援の強化が喫緊の課題であると言える。短期海外派遣プログラムの意義は、言語運用能力の向上というよりはむしろ、本稿で指摘した学部・学年を超えた交流機会創出のみならず、多様な学問的関心をもつ学生同士の交流によってもたらされる知的刺激である。このような知的刺激が将来的に中長期の留学に結実することもあるだろう。プログラムへの参加を礎石として、自身の学問的関心をさらに高め、主体的に学び続けられる学生の育成のためにも、多くの学生に短期海外派遣プログラム参加の機会を提供したいと考える。

謝辞：CAP in Guam 2023運営にあたり、予測不能な事態に対応してくださった国際部留学課海外留学係の松永千恵係長、木下博貴職員、瀬ノ口早紀職員（いずれも2023年11月の本稿執筆当時）に感謝します。多大なるサポートをありがとうございました。

九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞 (伊藤早苗賞)

留学生センター専任教員の受賞歴の報告

肥 後 裕 輝*

野 中 ちさと**

脇 坂 真彩子***

木 下 博 子****

1. はじめに

九州大学では、女性研究者の育成を目的として、2019年度より本学男女共同参画推進室が主体となり、優れた研究成果を挙げた若手女性研究者及び女子大学院生を表彰する制度「九州大学若手女性研究者・女子大学院生優秀研究者賞(伊藤早苗賞)」を開始した。この表彰制度は、本学の教員を対象とした「若手女性研究者部門」と本学で学ぶ学生を対象とした「女子大学院生部門」で構成され、応募者は他薦もしくは自薦によりそれぞれの部門に応募する。そして各部門において人文・社会科学系、理工学系、生命科学系の3分野から1名ずつ候補者が選ばれ、その中からそれぞれ最優秀賞が1名および優秀賞が2名の応募者に授与される。受賞者には大学総長より表彰状ならびに盾、また「九州大学伊藤早苗記念基金」から副賞の研究費が授与され、またこれまでの研究課題と今後の研究計画や抱負などについて懇談する機会に招かれる¹。

この表彰プログラムは本年度(2023年度)で第5回目を迎える。これまでに留学生センターからは、3名の専任教員が若手女性研究者部門に応募し、優秀賞の受賞を果たした。それぞれ2021年度、2022年度、そして2023年度における3年連続の受賞であり、いずれも他薦(留学生センター教授・肥後裕輝による)を受け、人文・社会科学系の分野の候補者として選出された末の受賞である。これまでの受賞者の功績を祝し、以下、この報告において各受賞者の本表彰制度への応募内容の概要(分野・研究テーマ・これまでの研究成果の概要)を記す。

*九州大学留学生センター 留学生指導部門 教授

**九州大学留学生センター 短期留学部門 准教授

***九州大学留学生センター 日本語教育部門 准教授

****九州大学留学生センター 国際教育部門 准教授

1 九州大学男女共同参画推進室 <https://danjyo.kyushu-u.ac.jp/notice/view.php?cId=2991>

2. 受賞者の概要

2021年度 若手女性研究者部門・優秀賞 受賞者

野中 ちさと 准教授（留学生センター・短期留学部門）

分野、専門分野：

人文・社会科学系、教育

研究テーマ：

高等教育における「ポスト国際化」の現状と課題の批評的実証分析、及び日本人学生と外国人留学生間における国際共修の場づくりを目指すアクションリサーチ

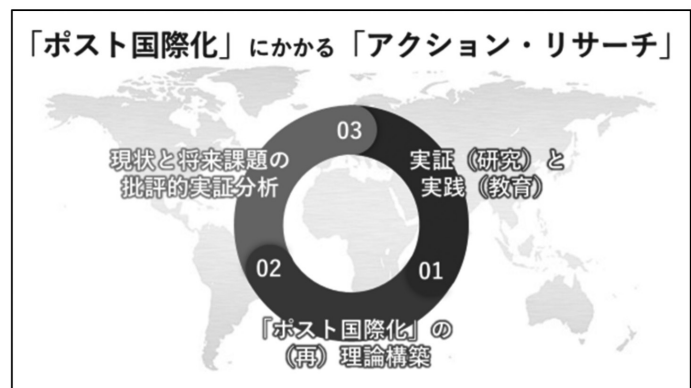
Critical and empirical analysis of the realities and challenges of post-internationalization in higher education and facilitating co-learning opportunities between Japanese and international students through dynamic action research

研究業績の要約：

受賞者は、2011年から2017年まで国際・異文化・多文化教育の分野における先進的な取り組みで世界的に評価の高い米国ハワイ州立大学にて研究教育活動に従事し、広くハワイ州全体の多文化教育（Multicultural Education）の歴史的・社会的背景の知識やその具体的手法の理論と実践を修得した。博士論文研究では、

「日本の大学の国際化」をテーマに、200名以上の日本人学生、外国人留学生及び関係教職員からアンケート及びインタビューを通じた定量・定性データを収集し、政策及び現場の観点から、その現状や主たる課題、将来の展望を多面的に分析した。

2018年4月に本学留学生センターに専任教員（准教授職）として着任以降、研究教育の国際化に起因する大学組織内の慢性的な人材不足や、外国人留学生と日本人学生の学習経歴と意欲の顕著な差異、また留学生のメンタルヘルス問題を始めとする「ポスト国際化事業の現状」が認識されていないことを強く実感した。この問題の理解と解決に向け、研究者及び教育者としての日々の研究活動と教育活動を有機的に融合させ解決の糸口を探る「アクションリサーチ（実践的研究）」を開始した。具体的には、担当科目において国際化に関する様々なテーマをディスカッションし、日本人学生及び外国人留学生の生の声を拾い上げ、学生間で問題意識を協議・共有する場とし、さらに学生の声を可能な限り授業の組み立てや展開にフィードバックしている。



これらの取り組みの成果と受賞者自身の博士論文研究を融合させ、2018年冬に英国 Multilingual Matters 社 から 国際学術書「Transcending Self and Other through *Akogare* [desire]: The English Language and the Internationalization of Higher Education in Japan (London, UK: Multilingual Matters)」を出版した。また、ポスト国際化の実態調査として学生や教職員を対象にヒアリングを継続しつつ、本学の特性や改善ポイントを見極め、「実現可能な新しい国際化モデル」を試案し実践、応用する場として、留学生センター所管施設である「学生交流サロン」（センター6号館1階）の運用を担当し今後の研究活動に資するべく整備している。これまでの研究成果の一つとして、高等教育の国際化を表面的または一律的に捉えず、「その機関に固有の多様化及び複雑化（multiplicity）のプロセス」として理解することの重要性が示唆されたため、学生間の多様な結びつきを促進し、また「外国人留学生」「日本人学生」というカテゴリーを超え、それぞれを「個」として認識、尊重し、共修を促す場づくりに取り組んでいる。さらに、研究成果としてのアウトプットは、従来型の研究論文に加え、受賞者自身のオートエスノグラフィー（自己省察型研究）としても発表することで、アクションリサーチの本質である教育者としての自信の自己評価と主体的成長を図り、日々の教育業務へのフィードバックを実践している。

2022年度 若手女性研究者部門・優秀賞 受賞者

脇坂 真彩子 准教授（留学生センター・日本語教育部門）

分野、専門分野：

人文・社会科学系、日本語教育・学習法

研究テーマ：

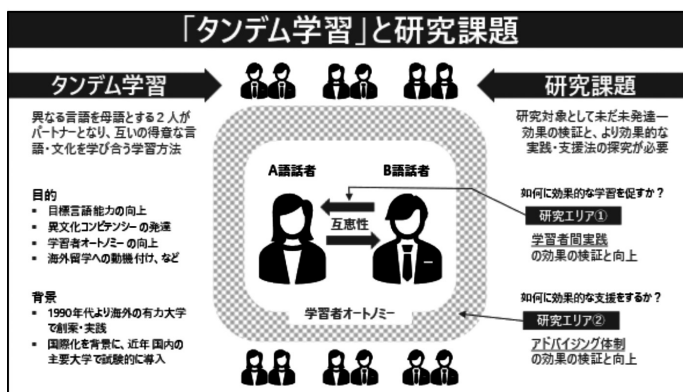
日本の大学機関における効果的なタンデム学習法の実証的探究

Effective tandem learning at Japanese universities – empirical exploratory research

研究業績の要約：

受賞者が専門とする「タンデム学習 (Tandem Learning)」とは、専門家によるサポートの下、母語の異なる学習者2人がペアになり、互恵性と学習者オートノミーを原則としながら、互いの得意な言語や関連知識を学び合うアクティブ・ラーニングの一つである。学習者の言語習得に加え広く異文化コンピテンシーの向

上にも高い期待が寄せられ、世界中の有力大学間で大きな注目を集めている教育的取り組みであり、



近年、日本国内でもいくつかの主要大学でこの取り組みが試験的に導入されてきた。

一方、タンデム学習は今だ発展段階にあり、より効果的な実践法とその効果の検証および発展可能性の模索を目的とした実証的かつ探求的な研究を要する。受賞者はこれまで、外国人留学生の日本語学習を担う研究者として、特に留学生から見た日本の大学機関に固有の学習環境の特性等も考慮に入れた実践とその効果的な実施法の実証的探究に取り組んできた。一例として、2008年に大阪大学で初の「対面式タンデム学習プロジェクト」を、2010年にはドイツ・ハノーファー大学 (Leibniz Universität Hannover) の研究者チームとの協働による、日本人ドイツ語学習者とドイツ人日本語学習者を遠隔で繋ぐ「E-Tandem プロジェクト」の発案・実施に携わり、これらの実践から得た実証データに基づいた国内外の学術誌への論文寄稿や学会発表を積み重ねつつ、国内外の研究者ネットワークを醸成し若手研究者として今後の研究発展に備えてきた。

2014年9月に本学留学生センターに着任以降、科学研究費助成金（若手研究B、基盤C）や学内研究支援基金を積極的に獲得し、上記の研究課題を追求すべく継続的に実証研究に取り組んでいる。これまでの主要な実績を以下3点に纏める。

1. 「九州大学タンデム学習プログラム」への探求的研究の導入と起動・発展の支援— 本学では唯一のタンデム学習の研究者として、2019年から全学規模で運営される「九州大学タンデム学習プログラム」に教員アドバイザーとして就任し、研究者としてこれまでの実証探求の手法の導入を通じてその起動と発展を支援してきた。並行して、九州大学と大阪大学で実践したプログラム参加者を対象に定量・定質的調査を行い、国内の大学機関と環境におけるタンデム学習の意義と課題、今後の展望を多面的に考察した。これらの研究成果を学会発表や論文執筆のためみならず、各校の運営チームへのアドバイジングにも有機的に活用してきた。
2. 「タンデム LogBook」やアドバイジングなどサポート体制の開発と効果の実証研究— タンデム学習においては、学習者自身の自律的取り組みに対する十分な内省と有意義なサポートの有無がその効果に大きな影響を与える。そのため、a) 学習者が自身の学習を内省し記録するための「タンデム LogBook」の開発、b) アドバイザーと学習者の対話により学習者の自律性を高める言語学習アドバイジング手法の発案と実施をし、これらの効果の実証研究を積み重ねてきた。また、またこれらの取り組みを、前述のドイツ語学習者と日本語学習者間の「E-Tandem プロジェクト」にも適用し、国際比較の観点から日本の大学のケースに固有の効果と課題を分析した。
3. 国内大学における効果的なタンデム学習の普及に資する研究成果の社会伝播・還元— 「国際的学び」と「アクティブ・ラーニング」を主要目標に掲げる今日の日本の大学機関において、タンデム学習の必要性は今後も飛躍的に向上すると考えられ、この必要性は言語習得や異文化交流・共学に関心のある一般社会の全ての人々にとっても同様である。そのため、これまでの研究成果を広く社会一般に伝播・還元すべく、本学外でも受賞者自身の経験と考察を多様な講演や特別講義を通じて伝播してきた。また、今後タンデム学習の実施を望む個人や機関に資するため、これまでに作成したレポートや補助教材を自身のHP上で随時一般公開している。

2023年度 若手女性研究者部門・優秀賞 受賞者

木下 博子 准教授（留学生センター・国際教育部門）

分野、専門分野：

人文・社会科学系、地域研究

研究テーマ：

現代イスラーム世界の政治と宗教のダイナミズム ～ AI 技術活用と文理融合による先駆的な研究手法を通じて

Analyzing politics and religion in contemporary Islamic world: An innovative interdisciplinary method

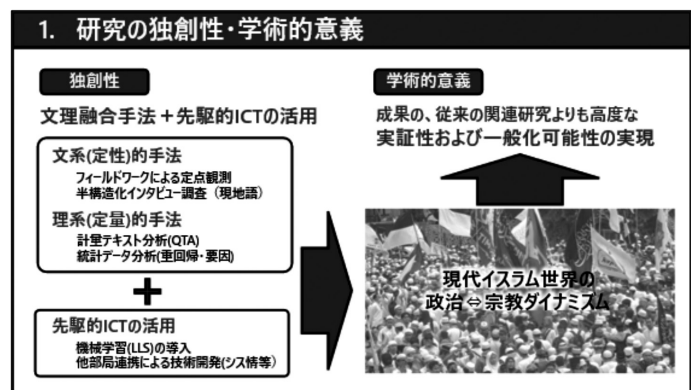
研究業績の要約：

地域研究学者として、受賞者は「イスラーム世界」を専門としている。イスラーム世界とは、イスラーム教に象徴される独自の価値観を中心に、長きに渡り構築された文化圏とその影響下で生きる人々の事を指す。この文化圏の人口は、出世率の高さにも起因し2060年には世界最大となる推算もあり、学術的研究を通

じたイスラーム政界の多様な文化社会事象の解明と理解は、我が国においても喫緊の課題となっている。

このうち、受賞者は東南アジアと中東のイスラーム社会における「政治と宗教の関係性とダイナミズム」の解明に取り組んできた。この課題に関連する従来の研究は、主に文系研究者による定性的研究が主流と言える。一方、受賞者は次世代を担う若手研究者として既存の研究をより前進させるべく、最新のAI技術を取り入れた文理融合による極めて先駆的な研究手法の模索に挑戦し、その適用により途上中ながら画期的な成果を生み出してきた。以下、研究代表者として獲得した科学研究費助成金（基盤研究C、若手研究B）および学内研究支援金などに基づく2つの研究実績を、その具体例として簡潔に紹介する。

1. LGBTQ（ジェンダーの多様性）への政治的対応は、今般のインドネシアにおいても大きな議論を呼んでいる。受賞者は、この国における近年の不寛容な政策（政治）はそのイスラーム教的価値観（宗教性）によるものという通説の妥当性を、下記の独自の手法により高度な実証性と汎化性をもって立証した。ここでは、この事象を扱うインドネシア語による多様な日刊新聞記事と一般の人々によるSNSへの投稿メッセージを、データとしてAI技術を応用した機械学習法（Machine Learning）により抽出した。そしてこの事象に対する報道トーン（ポジティブ/ネ



ガティブ)と感情温度の変化を計量テキスト分析法(Quantitative Text Analysis)により可視的に解析し(右図参照)、その相関関係を回帰分析で明らかにした。その結果を現地で実施した聞き取り調査などの定性的データと融合させることにより、その両者を結びつけている深層的な意味(latent semantic)を明らかにし、上述の結論へ導いた。

2. 同様の分析法を用いて、イラクにおける近年の政治と宗教性の相関関係の分析にも挑み、関連文献に大きな一石を投じる成果を得た。2018年のイラク議会議員選挙は、男女ともに前例のない多数の選挙動員を生み出し、世界の関心を集めた。このケースでは、選挙キャンペーンにおいてイスラーム主義主要政党がそのイデオロギーや政策志向を SNS (Twitter 等) を巧みに活用し伝播したことが、その大規模な動員の要因であるというのが通説である。受賞者の研究では、アラビア語によるその政党の機関誌やマニフェスト、また SNS 上での発言やメッセージなどのテキストの定量的および定性的な分析を通じ、投票者のモチベーションや関心の対象が政党のイデオロギーや政策志向とは合致しない点を解明し、この通説に対する実証的な異論を提示した。

このように、定量的・定性的研究を相互補完する文理融合のアプローチ、更に AI による機械学習を活用する先駆的な手法によって、既存の定性的研究で十分に解明されてこなかったイスラーム世界における政治と宗教の相関関係とダイナミズムの解明に大きく貢献した。また、同様の方法論によって東南アジアと中東というイスラーム世界の中核となる2つの異なる地域を横断的に分析している点も、挑戦が奨励される若手研究者ゆえの成果であると考えている。さらに国際研究の必要性が益々叫ばれる今後の研究界において、受賞者自身が有する英語、アラビア語、インドネシア語の高度な運用能力とそれぞれの文化圏における強固な研究者ネットワークも有益な研究ツールとして活用している。これらの先駆的な研究手法と技能そして国際的な人的資源を主軸とし、本学に籍を置くイスラーム世界研究の第一人者として継続的に成長するべく、今後も邁進していきたい。

3. むすびに

以上が、優秀賞受賞者3名の本表彰プログラムにおいて審査の対象となった研究テーマとそれに係るこれまでの研究成果の概要である。前述の通りこの表彰制度は本年度で第5回目でありまだ早期にある取り組みと言えるが、これまでに留学生センターから3名の受賞者が連年で輩出され、その研究力が学内で正式に祝され認められた点は言及に値すると考える。ここで受賞の対象となったそれぞれの研究課題は、本国を含む現代社会が抱える大きな課題もしくは追求すべき事案であり、今後の継続的な研究が学術界のみならず広く社会全体にとっても強く望まれる。それぞれの受賞者が良い先行例となり、今後も留学生センターの若手女性研究者が刺激を受け、先進的な研究に取り組み、新たな受賞者が現れることを強く期待して、本報告の結びとしたい。

Kyushu University New International Student Orientation

A Report of Fall 2023 Orientation

Masa Higo *

Zhengguo Huang **

New International Student Orientation – An Overview

Kyushu University International Student Center (ISC, hereafter) conducts = ‘New International Student Orientation,’ a semi-annual university-wide orientation event for new international students, shortly before the beginning of each semester: fall (starting in October) and spring (starting in April). With administrative support from the University’s International Student Exchange Division, this event is carried out for all the international students newly enrolled in the University each semester, regardless of their campus location, program, academic level, or purpose of study.¹ Participants include those referred to as non-regular students, such as exchange students, as well as regular (degree-seeking) students both at undergraduate and graduate levels. Research students – advanced graduate students – are also included.

The orientation’s goal is to help all new international students start and maintain safe and healthy lives not only as new, integral members of the campus community but also as residents of Fukuoka and the country at large. Lasting for about two hours, the orientation typically covers a range of topics pertaining to daily life affairs and necessary procedures that are essential or instrumental to the new international students for conducting successful academic, personal, and social lives as non-Japanese residents. Specific topics includes crime prevention; disaster prevention and response; immigration; and on-campus resources for healthcare and wellbeing, including university-approved student organizations and counseling services for international students. To accommodate participants’ varying language preference, the orientation uses both English and Japanese as the main means of communication. This orientation is coordinated not just as a campus event but also as a community event; several public or semi-public organizations in Fukuoka City – stakeholders in the University’s efforts to internationalize the campus community – contribute to this event as guest speakers. Such organizations include but are not limited to the local police department, an immigration bureau office, and local news media.

*Professor, Kyushu University International Student Center

**Associate Professor, Kyushu University International Student Center

1 Some students are also required to attend their program-specific orientations as well.

This report summarizes the New International Student Orientation Fall 2023. After briefly describing the attendee turnout and their feedback to the event, this report also discusses two issues as main areas to be improved for the next rounds of the same event.

The Fall 2023 Orientation – A Summary Report

The Fall 2023 Orientation was carried out on September 27, 2023 (Thursday) from 13:00 through 15:00 at the Concert Auditorium of Kyushu University Shiiki Hall (Ito Campus). According to the headcount manually done onsite by staff members of the International Student Exchange Division, a total of 444 new international students attended the event. This turnout made an attendance rate of 73.1% against the total number of those international students who reportedly enrolled in the University this semester: 608 students. This event was also attended by some university executives, including the Executive Vice President and Vice Presidents in charge of the University's international effort, for observation and advising purposes.

Members of two on-campus student clubs volunteered to perform at the beginning and during the intermission of the event as a token of welcome for all the incoming international students and as a way to introduce their activities to them. These clubs were invited because their activities represent part of Japanese traditional culture – traditional Japanese drums and sword-dance performances. In addition to all these campus community members, officers and public relations personnel from three external organizations were invited to take the podium. Those organizations included the Immigration Services Agency, Fukuoka Prefectural Police, and NHK Fukuoka, who were introduced as key community partners for international students' successful and safe student life. **Photo 1** and **Photo 2** below are pictures taken during the event and shortly afterward, respectively.



Photo 1. New Int'l Student Orientation Fall 2023 _1



Photo 2. New Int'l Student Orientation Fall 2023 _2

Table 1 below lists the specific topics covered during the orientation and the speakers for the respective topics. Each of the external organizations was given about 20 minutes for their presentation. The student staff members of the University's International Student Exchange Division – Q-Mate – served as the masters of ceremony throughout the event. Members included both Japanese and international students.

Table 1. Topics and Speakers for New Int'l Student Orientation Fall 2023

Order	Topic	Speaker/Performer
1.	Welcome Performance, Part 1	Kyushu U. student club 'Kakyo' (Japanese drums)
2.	Opening Remarks	Prof. Masa Higo, Kyushu U. ISC
3.	How to Start Life in Fukuoka	Kyushu U. Int'l Student Exchange Division
4.	Student Counseling Services	Assoc. Prof. Huang Zhengguo, Kyushu U. ISC
5.	Visa and Resident Status	Immigration Services Agency, Fukuoka Office
6.	Welcome Performance, Part 2	Kyushu U. student club 'Sword Dance Club'
7.	Safety and Crime Prevention	Fukuoka Prefectural Police, West Police Station
8.	Disaster Prevention	NHK, Fukuoka Branch
9.	Closing Remarks	Prof. Masa Higo, Kyushu U. ISC

Four additional events followed the main orientation, all of which were held outside the venue: a SIM card spot sale event, Immigration Services Agency's one-stop consultation services, a library tour, and a welcome reception party. While participation in these additional events was fully optional, the majority of the orientation attendees participated in at least one of them. The main orientation was video-recorded, made into an edited video clip, and posted on YouTube for public review. Those new international students who didn't attend were required to review the video clip to catch up with the information that they missed in the orientation.

Students' Feedback – Results of Post-Orientation Survey

A post-event survey was carried out online shortly after the orientation; the purpose of the survey was to gather the participants' feedback on the event to obtain insights for its continuous improvement in the future. The QR code and URL for the online survey form were displayed on the main projector screen in the venue for the attendees to access and complete onsite, before leaving the venue. To increase the responses, the survey was kept open until October 7, 2023. As a result, a total of 259 orientation attendees responded to the survey, which made a response rate of about 58.4% against the total number of attendees: 444 students.

The survey included six multiple-choice questions, each of which aimed to examine respondents' view of the significance and usefulness of the respective topics. **Figure 1** below illustrates the result of the first question, which asked the respondents to express to what extent they would agree with the following question statement – "Overall, the orientation was helpful for starting my student life as a new international student at Kyushu University." The respondents were instructed to select an answer option from a five-point Likert-scale consisting of "Strongly agree," "Agree," "Neither agree nor disagree," "Disagree," and "Strongly disagree."

About 71 % of the respondents – the vast majority of them – reported that they strongly agreed with the statement, and all the rest selected the “agree” answer option (**Figure 1**). No survey respondent selected other answer options. This result leads to a simple finding: all the orientation attendees found it to be, albeit to a varying degree, a positive experience to attend the event as they considered the event meaningful and helpful for them to start their lives as international students. Confirming this finding, a dozen respondents expressed their positive feedback in the free comment space available at the end of the online survey. Some of the comments are as follows:

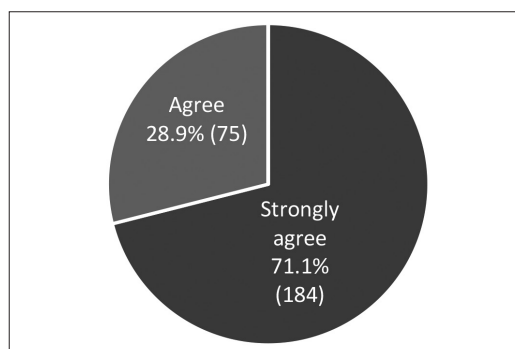


Figure 1. Responses to a post-event survey question statement: “Overall, the orientation was helpful for starting my student life as a new international student at Kyushu University.”

“It helped me to know some information that I did not know before.”

“The orientation gave us a lot of helpful resources to help adjust to life at Kyudai and in Fukuoka.”

“It was very entertaining and a good leveling ground so every student has the same information and everybody feels welcome during their stay.”

“They arranged the session really well, so new student can get essential information required to start new live in Kyushu.”

“I enjoy the orientation program it was very helpful to student who are just for the first time come to Japan.”

To Get Prepared for The Spring 2024 Orientation – Two Issues

While enjoyable to receive the positive feedback from the survey respondents, the Fall 2023 Orientation also suffered some issues to be addressed. The next round of the orientation, New Int'l Student Orientation Spring 2024, is scheduled to be held on April 4, 2024. To be prepared for conducting it even more successfully than the last one, improvements need to be made regarding at least the following two issues:

Issue 1: Increase the attendance – The University announced to all the incoming international students prior to their arrival in the country that it was mandatory for them to attend the orientation. As

mentioned earlier, however, the attendance rate for the event was about 73%: above a quarter of all new international students were absent. It is important for all of them to attend the orientation, as this event delivers information and knowledge pertaining to their health, safety, and wellbeing that they may learn only through this event. Reviewing the YouTube video clip may be helpful, but only onsite participation will provide them with opportunities to meet, befriend, and network with other new international students. A strategic approach is called for to more effectively reach out to future incoming international students and more strongly urge them to participate in the orientation as an essential part of beginning their student life at Kyushu University.

Issue 2: Increase the survey response rate – Similar to the first issue, the orientation needs to find a way to substantially increase the response rate to the post-event survey. This time round, the rate was just 58.4% - only 258 out of 444 orientation attendees responded to the survey despite formal requests made onsite while the attendees still remained at the orientation venue. It is essential for the orientation organizers to gather feedback from as many attendees as possible in order to effectively pursue their effort to continue improving the event and its impact on new international members of the campus community. For this purpose, the orientation organizers should set a response rate of 90% as the minimum goal and come up with effective ways to achieve this tentative goal for the next round of the event.

2023年度九州大学留学生センター FD 会

Faculty Development Meeting for the International Student Center 2023

黄 正 国*

楠 木 理 香*

1. はじめに

留学生センターは、来日した外国人留学生の留学生活の充実と日本人学生との交流を促進するために、日本語教育と短期留学プログラムとともに、積極的に留学生への情報提供と相談支援に取り組んでいる。今年度の留学生センター FD は、留学生センターの教職員だけではなく、留学生の教育と支援に関わる全学の教職員が参加できる場とし、留学生の教育と支援における現状を共有するとともに、留学生支援に関わる各部局やプログラム間の連携を深める機会とすることを目的とした。

2. 企画趣旨

今年度よりコロナ禍が収束しつつあり、キャンパス内で日本人学生と留学生が交流する機会が増えて、にぎやかな雰囲気が戻ってきている。その一方で、「言語の壁」、「文化の壁」、「制度の壁」を感じながら、人間関係やコミュニケーションに慣れず困っている留学生もいる。特に、母国で発達障がいや精神障がいの診断を受けた学生やセクシャルマイノリティの学生が年々増えており、このような学生を含む多様なニーズに対応できるキャンパス環境が求められている。これからの留学生の教育と支援においては、言語教育と国際共修の視点に加えて、障害学生支援、健康支援、マイノリティの権利尊重などが含まれたより「広い意味の多文化共生」の視点を取り入れていく必要があると考えられる。

今回の FD では、多文化共生に関する心理学のフィールドでご活躍され、心理学研究・教育・臨床・実践等における多様性配慮のための指針作成にも携わっておられる、鈴木華子先生（立命館大学）をお招きしご講話をいただいた。留学生センターの教職員と留学生教育と留学生支援に関心を持っている他部署の教職員総勢45名がオンラインで参加した。

*九州大学留学生センター准教授

3. 実施内容

日 時：2024年1月24日（水）13:00～14:30

会 場：オンライン

テーマ：「多文化カウンセリングの視点から見る留学生支援—コミュニティと予防—」

講 師：鈴木華子先生（立命館大学総合心理学部 准教授）

4. 講演概要

多文化カウンセリングの視点とは、社会（文脈・文化）の中で生きている人々が、それぞれ個性をもった多様な存在であることを理解し、すべての人の権利が守られる社会構造を構築していくことを目指す考え方である。

多文化カウンセリングの視点を取り入れて、留学生が置かれた大学環境を見なおすことが必要である。まずは現代社会で一人一人の多様性についての意識が欠如していることに気づくことが重要である。我々は日々の日常生活の中で無意識的にマイノリティの社会的属性を無視し、マジョリティの文化が中心となる社会構造を維持している。マジョリティ集団に属する人々は、優位性と特権が得られるにもかかわらず無自覚であるため、マイノリティが排除されていることに気が付かない。講師の鈴木先生が提示したマイノリティストレスモデル（Meyer, 2003）に示されたように、マイノリティは日常的なストレスに加えて、周囲の許容度の低さによるストレスを経験し、心身の不調に陥りやすい。

留学生の場合は、言語の壁、食事などの生活習慣の違い、人種や文化による差別、制度や諸手続き及び教授法の違いへの戸惑い、ホームシックと疎外感、アイデンティティの揺らぎなど、様々な困りごとを抱えている。また、援助を要請することにも壁があるため、相談窓口にアクセスできず、問題が深刻になる事例が少なくない。

鈴木先生が外国人留学生を対象に行った研究では、留学生が直面する困難として、「言語」、「日本人へのコミュニケーション」、「ホームシック」、「食べ物」、「住居」、「差別・排除の経験」が語られた。グローバル化とダイバーシティを推進している日本の大学にもかかわらず、留学生はマイノリティとして様々な障壁を感じていることが分かった。

一方で、留学生たちが自分を励ましたり、家族と友人とコミュニケーションをとったり、運動したりして、自分なりにいろいろなことを工夫し困難を乗り越えていることも分かった。このような研究結果を聞いて、留学生の強さに感心するとともに、日本が好きで留学に夢を抱いた他国の若者たちが、多大な我慢と努力を強いられていることに改めて気付かされた。鈴木先生が生態学的システムモデルを使って解説したように、大学環境の中に「留学生本人の努力である程度どうにかできる問題」と「留学生本人の努力ではどうにもならない問題」がある。そのため、我々教職員は、マジョリティの目線だけで判断せずに、自分自身がステレオタイプと偏見を持っていないかを常に意識する必要がある。

最後に、鈴木先生は予防的心理支援と多文化コンピテンスについても触れた。留学生の不応は本人だけの問題としてではなく、留学生を取り巻く環境全体の問題として考える必要がある。留学生の

生活環境をよくすることは、その環境にいる日本人学生と教職員の多文化コンピテンス（態度／価値観、知識、技術／スキル）の向上につながる。重要な点としては、「私の周りにマイノリティがいないからしなくてもいい」ではなく、「いなくてもきちんと多文化的な視点に基づいて行動する」という考え方にシフトすることである。大学構成員の一人一人が多文化に目を向けてはじめて、外国人も日本人もみんなが暮らしやすい環境を構築することが可能となる。